

西朋—20—

1979 · 1980

西朋登高会

巻きあげる龍巻を右とみれば

きまつて鬼^{クワイ}の仕業と信じ

左に巻き上る時

これこそ神^{シエン}の致来といふ

かかる無事にして原始なる民度の

その涯のはて

西はゴビより陰山の北を驅って

フねに移動して止まぬ大流沙がある

(逸見翁吉「人傑地靈」)

西明 20

1979.4 ~ 1981.3

西明登高会 .

目次

1979.4 ~ 1981.3 山行総覧	3
山行報告	8
1979年度	8
1980年度	28
西高W.V部山行表(1980年度)	74
「釣山行」	松本哲郎 75
「雑文」	青谷知己 76
「西上州の山」	森下真夫 78

1979.4 ~ 1980.3

山行No	期日	山行名	メンバー
7901	4/14	越沢バットルス RCT	青谷, 中野
7902	4/25	日和田山 RCT	青谷, 中野, 岡田, 池田, 木村, 河合, 井汲, 藤岡
7903	5/3~4	谷川連峰縦走 (三國峠~谷川岳, R マチ沢東南稜)	青谷, 中野, 岡田, 藤岡
7904	5/5	谷川岳-倉沢中央稜 〃 雪上訓練	中尾, 中野 久米, 遠藤(彰), 松本, 木村, 池田, 岡田, 藤岡, 井汲, 河合, 青谷.
	5/6	谷川岳-倉沢南稜 〃 東尾根	遠藤(彰), 青谷 久米, 中野, 中尾, 松本, 木村, 池田, 岡田, 藤岡, 井汲, 河合
7905	5/5	奥秩父乗沢東ノナ沢 (中尾)	森下, 中村
7906	5/13	丹沢表尾根	条原, 小島
7907	5/13	奥秩父西神山尾内沢キギノ沢右俣	森下, 中野
7908	5/25~26	奥秩父西沢~金峰山	岡田, 木村, 福原
7909	6/2	谷川岳 幽ノ沢中央山荘	青谷, 中野
	6/3	〃 一ノ倉沢鳥帽子沢奥壁中央カマ	〃
7910	6/9~10	丹沢勘七ノ沢	岡田, 藤岡, 井汲
7911	6/9~10	大菩薩小室川谷	森下.
7912	6/13	越沢バットルス RCT	青谷, 藤岡
7913	6/24	奥秩父東沢鵜飼谷左俣	森下, 松本, 青谷,
7914	7/4~15	頸城火打山~妙高山	岡田
7915	7/22	上越平標山仙倉谷西ゼン	森下, 青谷.
7916	7/23~30	北上. 燕岳~常念岳~蝶ヶ岳~ 涸沢~奥穂高岳	条原, 菊谷, 小島
7917	7/27~8/6	穂高合宿	
	7/30	中又白谷	青谷, 森下, 中尾, 遠藤(他)
	7/31	屏風岩山荘	青谷=宇佐美, 森下=中尾

山行No	期日	山行名	メンバー
	8/2	前穂高岳 北尾根	遠藤(信) 榑美 岡田, 河合. 井汲, 池田.
	8/3	北穂高岳 滝谷ドーム西壁 // ドーム西壁(上部)~北壁 // グレボン 芳野ルート	遠藤(信) 池田 藤岡 青谷, 河合. 中尾, 井汲.
	8/4	前穂高岳 北尾根 仙岸 松高ルート // 北糸 新村ルート	中尾, 井汲. 松本, 藤岡.
	8/5	北穂高岳 滝谷 P2 フラック早大ルート	青谷=河合, 上野=池田
	8/6	// フラック尾根	松本, 井汲
7918	8/7~13	北穂高~双六岳~烏帽子岳 縦走	岡田, 木村, 榑美, 池田, 藤岡, 河合.
7919	8/7~10	北ア. 剣岳~五色ヶ原~黒四ダム	遠藤(信) 他
7920	8/10~15	南ア. 北岳 バックス 北尾根	中村, 渡辺
7921	8/14~15	利尻岳	青谷, 他3名
7922	8/19	上越 湯檜萱川 本谷ゴボ-沢	森下.
7923	8/26	上越 巻機山 * 多沢	森下 * 村田 (早大山会OB) * 股部 (ユニバツ山岳部)
7924	8/27	筑波山 RCT	青谷, その他
7925	9/1~10	上越 巻機山 割引沢	遠藤(信) その他
7926	9/23	上越 万太郎谷 井戸屋沢 (中尾) 荒沢山 北カドナ沢 (中尾)	森下, 遠藤(信)
7927	9/23~24	谷川岳 幽沢 左方ルンゼ	青谷=藤岡, 遠藤(信)
7928	10/10	谷川岳 タカノス沢 A沢	伊東(顕), 遠藤(信), 中野 井汲, 有賀
7929	10/14	上越 赤谷川 管穴沢	森下
7930	10/20~21	ニ多山 RCT	青谷, 遠藤(信), 伊東(顕) 藤岡, 河合, 有賀
7931	10/20~21	南ア. 甲斐駒 赤石沢 奥壁 左ルンゼ	森下, 中野

山行No	期日	山行名	10-行
7932	1/2~4	南ア鳳凰三山 縦走	糸原, 小島, 他1名
7933	1/7	西上州・ミドリ岩三段の麓周辺	森下
7934	12/2	表妙義(白雲山~相馬岳~金洞山)	森下
7935	12/8	八ヶ岳 構岳西壁裏同心ルンゼ"	青谷, 遠藤(信), 中野
	12/9	八ヶ岳 赤岳西壁 南峰リッジ	青谷, 遠藤(信), 中野
7936	12/9	頸城 雨鈴山	森下,*服部(ユニバツ山岳部)
7937	12/21~27	南ア. 甲斐駒ヶ岳~尾白溪谷.	青谷, 中野
7938	12/29~1/2	中ア. 宝剣岳~木曾駒ヶ岳	遠藤(彰), 遠藤(信)
7939	1/1~1/5	北ア. 有明山 深沢右俣	森下
7940	1/2~1/4	八ヶ岳 構岳西壁無名峰南稜 八ヶ岳 赤岳西壁主稜.	青谷, 中野 青谷=井汲, 中野=藤岡
7941	1/20	上州・赤城山 粕川 銚子の伽藍(中退)	森下
7942	2/3	裏妙義谷急山入山川ホトケ沢	森下,*服部(ユニバツ山岳部)
7943	3/0~1	頸城 戸隠連峰高妻山(中退)	森下,*服部(")
7944	3/17	奥秩父 両神山 尾内沢キギ)沢右俣	森下, 青谷
7945	3/15	奥秩父 両神山 河原沢行者坊ノ沢	森下,*服部(ユニバツ山岳部)
7946	3/1~25	北ア. 新穂高~槍ヶ岳~笹ヶ岳~ 錫杖岳. 及 錫杖岳前降下左ス3山"	青谷, 上野野, 中野, 河合

1980・4～1981・3

山行No	期日	山行名	ハローテ
8001	4/6	日和田山 RCT	青谷, 中野, 藤岡, 河合, 斎藤, 宮崎, 穴戸.
8002	4/27	西上州・大岩 (大岩・シロ岩間の沢)	森下.
8003	5/3	上越足指子本谷～荒沢山	森下, 中野, 井汲, 藤岡, 宮崎, 斎藤.
	5/3	上越足指子岳 榎木の沢	山野, 中尾, 河合.
	5/4	荒沢山 風穴スラブ	中尾, 藤岡
		◇ 2の沢メインリッジ	森下=宮崎, 井汲=斎藤
		◇ ダイレクトスラブ (中退)	中野, 河合.
	5/5	◇ 前衛スラブ (中退)	森下, 中野, 井汲, 斎藤.
8004	5/11	奥秩父東沢西ノメ沢	森下.
8005	5/18	奥秩父東沢東ノメ沢	森下, 青谷.
8006	6/1	西上州・東福寺川右俣 (中退)	森下.
8007	6/15	奥只見 浅草岳～鬼ヶ面山	松本.
8008	7/6	谷川岳 幽沢 滝沢	森下, 松本, 青谷.
8009	7/13	西丹沢モクゴシ沢	藤岡, 井汲, 河合.
8010	7/13	上越大源太山 弥助沢右俣	森下.
8011	7/20	上越世能岳 武能沢	森下.
8012	7/27	上越仙倉谷大ノ沢 大滑の白板	森下, 中村.
8013	7/23-27	北ア・雲ノ平 周辺	糸原, 菊谷 他3名
8014	7/25-31	北ア・槍ヶ岳北鎌尾根～徳高合宿	井汲, 河合, 穴戸, 斎藤, 宮崎, 藤岡, 久米.
8015	8/1～6	北ア・雲ノ平, 高天原 周辺	藤岡, 河合.
8016	8/5～6	鳥甲山北面釜川エビノウ沢	森下, 青谷, 宇佐美
	8/7～8	鳥甲山 白嵩 東壁 ZILINゼ	森下=青谷, 中野=宇佐美
	8/9～10	白砂山 中津川 浅沢	青谷, 中野, 宇佐美.
8017	8/15	越後三山水無川 真沢 (中退)	森下.
8018	8/17～21	会津駒ヶ岳 (檜波岐川下流～袖沢 中門沢)	松本, 伊東 (顕)

山行No	期日	山行名	パーティ
8019	8/31	上越白毛門ゼニ入沢	森下,*服部(日本ユニバク山岳部)
8020	9/4~15	越後三山水無川真沢	森下
8021	10/04,2	足尾山塊皇海山 (汗川小田倉沢~松木川仁田元沢. 沢ガ山)	青谷, 井汲, 宮崎, 斎藤,
8022	19/11/2	上越大現山ジロト沢	森下,*小泉,*湯谷(ゼネラル山会)
	/11	ジロト沢左保~Dルゼ下降	
	/12	ジロト沢Bルゼ前スラブ	
8023	10/27	東北朝日連峰祝瓶山(引返す)	森下.
8024	10/31	白山北面の沢	青谷. その他
8025	1/2~3	奥秩父~瀬川大常木谷	松本
8026	1/23,24	西上州東福寺沢左保~南小太郎山, 御場山周遊	森下, 松本.
8027	1/30~1/2	戸隠本院岳ダイレクト屋根(中退)	森下, 松本, 青谷, 遠藤(彰)
8028	1/11	御坂三ツ峠大幡川皿+八滝沢	森下,*服部(ユニバク山岳部)
8029	1/18	奥秩父西神山薄川七滝沢(中退)	森下, 青谷.
8030	2/1	奥秩父南天山	森下,*服部(ユニバク山岳部)
8031	2/15	奥武蔵川浦谷烏帽子沢	森下, 青谷.
8032	2/8~10	頸城雨鈴山南稜(中退)	森下, 青谷.

1979.4 ~ 1980.3

山行日記録

会長	平木 桂太
チーフリーダー	山野 裕
学生リーダー	青谷 知己
〃	糸原 弘子
総務係	松本 哲郎
〃	糸原 弘子
会計係	中村 正俊
	中野 敏彦
西高係	中尾 伸二

17903 谷川連峰縦走
 係 青谷知己

- 1979年 5月3~4日
- 青谷知己, 中野敏彦, 岡田隆,
藤岡毅

5月3日

越後湯沢 6:12 ~ 三国峠 7:35 ~ 平標
 山 11:30 ~ 万太郎山 15:37

例の夜行で例の様に眠れぬまま、湯沢に着く。タクシーで三国峠下まで行って、眠いまま登りにかかった。稜線には殆んど雪が無かったが、国道17号を下に見ながら、高度をかせぐと雪も結構出てきた。平標小屋では雪の穴で御犬様が座って、我々を迎えてくれた。平標を過ぎる頃には、晴れていた空も次第に曇り始め、雪もちらついてきた。予定では、仙ノ倉泊であったが、時間的にも早く、行ける所まで行こうと全員快調にとぼす。そろそろ日が傾き出す頃、万太郎に着き頂上で幕営する。夜頂上から見た水上温泉の灯が印象的であった。

5月4日

発 6:21 ~ 9:12 谷川岳 13:45 ~
 15:40 一ノ倉沢 出合

今日も快晴。目前に見える谷川岳を目標してピッチを上げる。あつという間に谷川岳トマの耳に着く。下るには時間が早すぎてもたないないので、青谷、中野はマチガ沢東南稜を登ることにした。源頭を下る2人を見送って、岡田と藤岡は、オキの耳の経てブロッケ雪崩の音が轟く一ノ倉沢を覗きに行ったりした。トマの耳に戻り昼寝をしていたが、県警のヘリが空を飛び交い昼寝どころではなかった。

4人揃ってから、しばらくして頂上を出発、西黒尾根を走る。金中からマチガ沢の枝沢に入り、雪面に出来た溝の中をズルズル滑りながら下り、本谷のスキーの連中を横目で見たが、頂上を出てから、1時間強で出合に着いた。大休止をとった後、まだ雪の消えきらない旧国道を一倉出合に向かい、出合で幕営して後発隊を待つ。(藤岡記)

17909 谷川岳 幽沢 中央ルンゼ
 係 青谷知己

- 1979年 6月2日
- 青谷知己, 中野敏彦

谷川岳の岩壁は、昨年まで我々の代には、笑顔を見せてくれた。通うごとに雨に追い返され、又途中敗退の憂目を見てきた。しかし5月以来急にゴ気嫌になってくれたようだ。そして今回も快晴の天気をもって我々を迎えてくれた。日曜は混雑をエけて、幽沢の中央壁と滝には、エまれた、伸びやかなスラブにルートを求めた。早い者、遅い者も幽沢のブロッケを避けた展望白経由の道が裏目に出て、さんざんのアルバイトののち、やっと二股に出た。ここからは、左股の雪渓をたどり、中央ルンゼに向かっている沢に入っていく。この明るさは、一倉の陰鬱さと対照的。気分が晴れやかさは、自信と意欲をかきたててくれる。中段の一連の小ハング帯下で本格的登攀が始まる。しかし、ここを軽く越せば、また快適なスラブが続く。適当に壁んで登っていくと、核心部のピッチに入る。右のカンテにあるテラスでピッチをきり、確保

のがちりしている事を確めて登り出す。どんな所でも、確保のピンだけはしっかりと、今回の示合せである。ここはヤヤハラスの要するカンテをジワジワ登り、最初のピンに達する。争がかりのない岩をボルトにたよってトラバースするわけだ。その3本の土びたボルトをたどるとついに、V-の凹角となる。しかし意気込みのもとに、みるみる足下となり、そのピンも傾斜を緩めた。中野も意外と楽そうに登ってきた。あとは2Pほど快進はスラブをたどれば終了点であった。我々2人とも初めて花実した登攀であった。いやらしい中々新道をやとこのことで、すぐ降りる頃雷雨にみまわれ、周囲の岩壁に落ちる雷におっかなびっくりだった。

(青谷記)

7915 平標山 仙倉谷 西ゼン
—— 係 森下道夫 ——

- 1979年7月22日
- 森下道夫、青谷知己

7月22日(曇)

土樽 4:00 ~ 西ゼン 出合 6:45 ~
綾線(10:15 ~ 11:00) ~ 新道 出合 12:25
土樽 15:00

土樽駅前で仮眠の後、夜の明けきらぬうちに出発。群大ヒュッテより仙倉谷に入ったため意外に時間をくい。やとこのことで、西ゼン出合。新道をたどるのが正解。出合から見る西ゼンは素晴らしいスラブだ。途中ひろったおらしきツバキやタバタとフリクションをまかせた登り出す。スラブを2,3越え、左岸のいやらしい草付をトラバース気味に行けば、いつものまにかオスラブに入っていく。水流の右側を快進に高度をかせぐ。雪塊などを見て、階段状の滝をガイル出して

越えれば、オスラブ。今度は水流の左側をルートファインディングも果しく登っていく。200mのスラブもようやく終ると、水流を渡り左岸より落口に抜ける。ここで一服。森下はナントとこぞんを持ってきていた。ここから岩相も変わり、水流を減った小沢を右へ右へ行けば、いつものまにか熊笹の踏跡に入り、地唐も見える綾線に出る。綾線はガスっているが、何とかまあ快進な沢であったことか。西ゼンを見下ろしつつ新道を下る。

(青谷記)

7917 夏山・穂高合宿
—— L. 青谷知己 ——

- 1979年7月28日 ~ 8月6日
- 青谷知己、上遠野着、森下道夫、中尾伸二、夏藤信行、松本哲郎、岡田隆、宇佐美雅己、池田彦男、井坂重弘、河合秀樹、藤岡毅

今年の夏山は、191年になく、14人という多くの参加者を見たものの、その分まどまりがつかず多様な構成となった。

オ1期の中又自谷屏風岩の登攀、オ2期の濁沢定着、そしてオ3期の縦走と分けることができよう。又後半には上廊下下降を予定していたが、山野の都合がつかず、縦走に変更された。岩登り期間中は天候に恵まれず、悪コンディションの中、新人には、つらい登攀になったようだ。しかし、いざいざ意欲やけじめに欠ける態度が見られた事は残念である。これは上の代の指導力、責任も問われることであろう。やはり、合宿は、全員参加を原則に、各自その意

養を自覚している必要がある。人数がぶるに従い、多様性も要求されてこようが会としての力を発揮できる場であってほしいものだ。

屏風岩「ルゼ」の最終ピークでの落石によるケガ(幸い軽傷)、北尾根3・4のユルからのグリセド失敗(尻さケガ)、ともに中尾の事故であるが、大事に至らなかったものの、一つまちがえば大きな事故になるのが山の常である。改めて書き留めることにより、会員に注意を喚起しておきたいと思う。

(以上 青谷記)

7月30日(晴)

中又白谷 P 青谷 森下 中尾 遠藤(信)

2日降り続いた雨もようやくおさまり、やっと登攀を始めることができる。穂高周辺にあって忘れられた存在である中又白谷は、最近注目されだした下又白、そして有名な中又白谷にはさまれて、新村橋 崎に注ぐ。登山全集に載った記録にふと目がとまったことが、この谷を訪ねてみたい動機となった。そして期待に違わず、すばらしい溯行であった。言聞るのよくない宇佐美をテントキパーに残し、4人で徳沢をあとにする。昨日までの雨がうそのように

1979年度 夏山行動表

1979	7.27	夜行発 (青谷, 森下, 中尾, 遠藤(信), 宇佐美)
	28	上高地～徳沢 雨により停滞
	29	雨により停滞
	30	前穂高東面中又白谷 (青谷, 森下, 中尾, 遠藤(信))
	31	穂高屏風岩「ルゼ」 (青谷=宇佐美, 森下=中尾)
8.	1	徳沢～瀧沢 (あらたに岡田, 池田, 河合, 藤岡, 井汲, 入山, 森下, 山)
	2	前穂高北尾根 (遠藤(信), 宇佐美, 岡田, 河合, 井汲, 池田)
	3	北穂高岳滝谷ドーム西壁 (遠藤(信), 池田, 藤岡) ≪ ドーム西壁～ドーム北壁 (青谷, 河合) ≪ グリション 芹野ルート (中尾, 井汲)
	4	前穂高岳北尾根千峰松高ルート (中尾, 井汲) ≪ 北条, 新村ルート (松本, 藤岡)
	5	北穂高岳滝谷PII フランク早大ルート (青谷=河合, 上遠野=池田)
	6	北穂高岳滝谷 クラック尾根 (松本, 井汲)

晴れ渡り、緑がまぶしく輝いている。新村橋脇の見過ごしそうな小さなゴロをたどる。倒木帯などを過ぎ、水流をみるようになる。F1下の雪渓に出た。F1は幅の広いみごとなスラブ帯である。正面には、人エルトもあるらしいが、ここは左側をまくことにする。ルンゼを辿り、樺木帯を大きくトラバース、20m程の懸垂で落口に立つ。行手は美しいスラブ状ルンゼが続く。44ニードルの滝を11つか越えると、ボルトのあるF3。ギヤルを出しアブミで越える。右側もフリーで抜けることができる。しばらく行くと、スラブ状のF5。容易だが慎重を期してスタカット2Pで抜ける。天気は良く岩も固く、沢登りというよりも、快適な登攀である。すると、中又白のクライマックス、堂々としたF8が眼前に現れた。左側に細々とした水流があり、頭上高く落口ガのぞく。そしてその上には紺碧の空が広がる。青谷トップで取付く。右上のシュリング目指すが、とんだまちがい。5m絶壁のクライムダウン、落石の雨を下の3人に飛ばしながら、中段のテラスに至る。3番手遠藤がテラスにつくとともに、2P目に入る。細かなホールドを右左にひらひらつぎヤイルをのぼす。缶中がぶり気味のところに逆さハケンを打ち直してAで乗越す。更に越沢のオズスラブの様な壁を快調に辿れば落口。広い明るいテラスである。眼下に取付を見降りし眺望も開け最高だ。あと3人も快調に落口に至り、大休止。滝上は快適なスラブ帯が続く。運動靴にもってこいのフリクション登攀4人思ひ思ひに楽しんでいけば、11つしか空も開けて中又白の地味に導かれていた。はじめての中又白池、前穂の岩壁群を頭上にし、人影は少ない静かな、ただすまい、自然気分もゆるみ、裸になって、

日向ぼっこ。東壁1の継続もこれではかなぬ話。山岳での憩を満喫し、膝をかかかきせて中又白谷へ下った。中又白谷は解風のルンゼを小さくした様なたたずまい。中又白谷をアプロウチに前穂壁群を登れば、スケールのある素晴らしい登攀が期待できよう。

(青谷日記)

8月3日

北穂高岳 滝谷ドーム西壁 雲表ルート
P(青谷・河合)(遠藤(宿)池田・藤岡)

初めての、滝谷登攀に快晴を期待していた我々3人の新人は、その期待を見事に裏切られ西風が強く、雲は低くたれこめ、ヤッケなしては登れないような状態であった。核心部であるB左スを開腹してA左ス下のテラスでアゲイン。我々は3人で登っているのが、先行パーティにどんどん引き離されるが、ハンゲ下で一緒になる。そこで青谷はハンゲでもたっている。他会の新人を抜き、一番最初に登ってしまった。河合も初めてのアブミ操作に苦労していたが何とか登り切った。ハンゲを越え、IV級のスラブで人工からフリーに移る所で苦労した。もう終点点は間近、階段状の所を登り切ると、遠藤が寒そうに震えていた。初めての滝谷に感慨にふけりながらヤイルを巻いた。

(藤岡日記)

8月5日

北穂高岳 滝谷PII トラウプ早大ルート
P(上遠野、池田)、(青谷、河合)

昨日、霖雨の中、南嶽を上がってまたが登れず、今日も霖が濃いが、B沢に

入ることにする。僕はB沢は初めてであり、上遠野に先導してもらう。西明20年前のレリーフにありさつしてからB沢に入る。霧の吹き上げる中、1度まちがいたが、赤茶けたバンドを辿り、尾根の取付にむかう。下見はPⅡ下までいくが、早ムトを登ることにした。新人は寒い寒いといやいやつてくる。上遠野=池田パーティが先に取付く。何年ぶりの上遠野は、2人の手持ちの今慎重に登りはじめた。途中ピナ不足で補正してあげる。2P目上遠野パーティは左側の凹角を左上、1僕はすぐ上の4ムニ-を行くが、いまづまり左トラバースをする。3P目は、クラク沿いに進むが、思いきった姿勢でカレはびいに登れる。上遠野は久しぶりの岩登りに大部しごかれた様子がいかれたとほやくことしり。次のピツは凹角からクラクを思いついて左トラバース。あと15m程快適なクラクを登るとPⅡの頭どめだ。

この登攀で、上遠野よりいくつかの問題が指摘された。①シュリンゲの多田について、②中間ビレーの少なさについて、③ムトは自分でさぐるという姿勢について。これらの点は最近の西明の登り方に一考を投げかけるものだと思う。シュリンゲはどこでもかけるものと扱ってまたし、ムトはムト四とピナを扱っては登るということがまああつた。又中間ビレーに関しては、安易な慣れと自信(面倒臭いというもある)に裏打ちされている。登山を原点から考えてみる必要がある。

さて、新人をつれてクラク尾根をもう一本と思ったが、新人もしぶるので、北壁4ムニ-と変更したが、霧で取付がわからず今日はやめにした。南壁の

テント場に戻ると、松本産が上がりてきており、新人をもう一度うながしたが、登る気なく、切角連れていこうというのだから奮起してもらったかた。

(青谷日記)

7918 北ア 北穂高岳～鳥嶺子岳
係 岡田隆

・1979年8月7日～8月13日

・岡田隆、木村孝史、福原耕太郎
池田産男、藤岡毅、河合秀樹

8月7日(雨) 停滯

8月8日(晴)

北穂 6:05～槍ヶ岳 13:30

又しる川の晴天の中を槍に向う。大キレットを難なく越え、気持ちいいほど足が前へ進む。南中、大喰を通り人ゴミの槍肩に着く。

8月9日(晴)

発 9:10～双六山荘 13:00

西鎌尾根を下る。ふりかえると北鎌尾根のスタイラインがすばらしい。

8月10日(晴)

発 7:15～三蓮 9:45～祖父平 13:08

ここで新穂高に向うパーティと別れ、三蓮に向う。三蓮から一気に黒部乗越にかけ下る。ここは人影も少なく静かなところだ。五郎沢上部の湿原の中を黒部川に向う。黒部川を少し上り、対岸に渡ったところが祖父平である。ここも静かな所で、快適である。

8月11日(晴)

発 7:25～9:35 雲平(高天原住復)

今日は祖父沢をつめる。上っていくと、しだ

いに、人臭く(キジ臭く)なり。雲の平幕營地につく。ここに、テントをはり、藤岡をおいて高天原に向う。途中でハビとお見合をして走って逃げる。山荘の先にある温泉沢で、温泉につかってもどる。

8月12日(晴のち雷雨)

登 7:03 ~ 野口五郎岳 11:23 ~ 鳥帽
3小屋 13:50

野口五郎岳を越えて、鳥帽3小屋に向う。鳥帽3の幕営地は早く着かないとすぐ11:00になってしまって、小屋に女何を言っている人がいた。

8月13日(晴)

登 7:55 ~ 10:35 高瀬ダム 11:00 ~
くす温泉 13:00

11:15 下山の日である。カ立尾根をただひたすら下る。下りきると、そこには吊り橋、トンネル、ダムと次々に建造物の現われ、山をおいたという気がしてくる。ダムで荷をあずけ、くす温泉に向って、ひたすら歩く。

(河合記)

7924 筑波山 RCT

係 青谷知己

• 1979年8月27日

筑波山に岩石採集に行つた時、ちよと立寄って一汗流してまた、山頂直下、ロープウェイの直横にあり、ルゲを越えながら皆エムに手を振るといふ真合。班の岩という、見慣れぬ深成岩より成り、固くブリクシオンもきく。こちんまりした岩場で、3~4往復もすればおわり。フリーヒート一応練習できる。大ルゲも足がつかうので容易だ。筑波山にでも行つたときには寄ってみるといい。

7921 利尻岳

係 青谷知己

• 1979年8月13日~15日

• 青谷知己他3名

8月13日

稚内から船で2時間余、紺碧の北の海に浮かぶ、礼文島とは対照的に鋭く天を穿く利尻富士が眼前に迫る。

入港地鰯泊から見上げる利尻山は意外に低くおだやかな姿を見せるが、バスで右廻りに走るに従い、仙法志、南嶽を派生するザガギザな稜線を見せ、登高意欲がいやがうえでも盛上ってくる。登山路を鬼脇コース(東嶽)に決め、買出しを済ませ、学校跡のキャンプ場に入る。

8月14日(快晴)

鬼脇キャンプ場 8:30 ~ 11:10 旅人岩 11:30 ~ 15:30 摩崖 16:30 ~ 北峰 17:30 ~ 長官山 18:30

ヤマタイ沢沿の林道をセシヤ蝶と旋びつつ行くと、ツルカがあり登山道が林道に分入っていく。この沢が最後の水場。重エを惜しんだばかりに、頂上までの長い道のりで水10~12リットルを生じようとは...。なにしろ海岸から1700mの円錐体を登るのであるから、長くだらだらした登りが続き次第に急になっていくというわけだ。後方に広がっていく。海をなぐせめに電光坂に大汗をかきつつ登っていく。低木帯にお花畑が交じるようになる。左手に南嶽が鋭い姿をみせてくれる。しかし夏はちと食指が動かない。ヤマタイ沢源頭は、いかにも火山らしく、溶岩と、スコリアの層構造がみごとだ。それは反面非常に脆そうだからこゝろである。旅人岩という安山岩の大岩で昼飯水不足が皆不気味。ここからお花畑の点在する

露岩帯となる。1人が不調になり、意外の高
 距にバテ気味、やっとのことで龜嶺山に至る。
 ここからの南稜P2、P1、バットレスは大迫力
 でせまってくる。また北東稜の窓岩も見え
 てくる。それ以上に眼前のルナは、左手が
 すっぱり切り落ち、ガラガラのやせ尾根、フ
 ックスローアが張られ、立入危険の立札まで。
 しかし頂上は意外な近エで見上げること
 ができる。ここを慎重にたどれば、最後
 の急登となり、お花畑へと入っていく。静
 かにこいでいけば、南峰の鞍部西壁から
 吹き上げてくる風に今までの苦辛が消し
 飛ぶ。いやはや爽に長かった。北峰は、2、
 3コブを越えたところ、名のアイクスローアを
 たどれば、小エな社の立上頂上に至る。周
 囲に花が咲き乱れ、ローソク岩が眼前に
 ぞり立つ。それにも増して美しく、周囲90km
 の海岸線が輝く。すばらしい絶頂である。
 夕暮の気配の中、北稜を1時間下った、避
 難小屋跡にテントを張る。幸運なことに、眼
 下の凹地で火を得ることができた。夜は
 星空のかわりに、漁火が輝き、岬の塔台
 が静かな夜を演出してくれた。

8月15日

発 6:05 ~ 甘露水(7:30~9:00) ~ 鴛泊
 9:50

大勢の夜間登山者とともに、鴛泊コース
 をかけ下る。このルナはよく整備された何
 の危険もない最もポピュラーなもの。頂上
 から海岸まで植物の種類も多様であり、みごと
 な垂直分布と林相をなす。そんな事に感心し
 ながら行けば、鴛泊も
 真近であった。今日は礼文島へ渡る予
 定。船の時間まで、海泳ぐことにした。

次回はぜひ冬の利尻を言方ねてみた
 い。あの稜線が氷雪に輝く時、巖は
 とともに素晴らしい登攀を約束してく
 れることだろう。

(青谷 記)

7922 上越 湯楡川本谷
 森下 道夫 (単独)

・1979年8月19日 (晴)

土合 4:00 ~ 10:10 朝日岳 10:30 ~
 土合 13:30

湯楡川本谷は美しいナメ床と釜が
 目立つ沢であり、きっと都会生活で、
 ひからびた心に、うるおいを与えてく
 れることだろう。

7927 谷川 岳 幽ノ沢 左方ルンゼ
 係 青谷 知己

・1979年9月23日

・青谷 知己、藤岡 毅

雲行きはあやしく、一の倉沢出合のテ
 トの群れは、雨に煙っていた。幽ノ沢を
 めざすが、雨はついに土砂降りになっ
 てきた。幽ノ沢出合の岩川屋で雨宿り。今
 日はだめだと寝こむ。9時頃雨も
 あがり、濡れた岩壁群が姿をあらわし
 てきた。これは行けるぞと、急ぎ準備を
 し、幽ノ沢に入る。爽快なナメ道カー倉
 にはいり、明るくまで続き、カールポテンに
 達する。今日は、我々が一番集りだ。
 左方ルンゼは水が流れてはいるのか、スラ
 ヲ帯は縮み様になっている。T1からの
 びるリッジの左側のスラブに取り付くが、
 急なスラブに、地下足袋もすべりがちで、
 冷汗をかかせる。トラバースして大滝
 下へ達するが、水がハンクからしたたり
 かなりの悪相をしめし、右側の草付
 崖を登る。水が流れ、緊張するが、意外
 とスタンスホールドは決まってくる。次のセ
 ックも出だしが悪く緊張したが、左にトラバ
 ースした後は、浅い溝が上部に続いていた。
 ここで、藤岡にトッポをやすむ。幽ノ沢上部

の黒っぽい岩は、下部の石英閃岩と違い、見るからに、きたなくてすまじい。そんな草付の多い岩場を数ピッチたどると、見覚えのある終了点に達した。まずは完登を祝してから、中芝新道をたどったが、途中懐電を出す羽目となる。2度と下るまいと思いつつ、すべるところで芝倉沢出合、幽沢出合で荷物をまとめて、遠藤(彰)の待っセンターへ向かう。心配顔で待っていた。藤岡は帰る。

9月24日(雨)

会の登っていないコックを登ろうと思っていたが、雨のためスゴスゴ帰途につく。

(青谷記)

7930 双孛山 RCT
係 青谷知己

- 1979年10月20日~21日
- 青谷知己、伊東顕、遠藤信行、藤岡毅、河合秀樹、他1名

10月20日

車で双孛山登山口へ行く。石灰岩の壁が白く輝いている。夜は車の中でラジオを聞きながら寝る。

10月21日

始め、ローリツ岩に向かう。ここで、足慣らしをする。この後、正面壁に向かう。遠藤、青谷と別れて、中央稜へ行く。中央バンドを右にトラバースして広くなった所が取付である。ここで2125に別れて登る。1P目は、藤岡がトツツで簡単にぬける。2P目はテラスの左方から取りく、出だしが多少難いかなんとかぬける。3P目、階段状の岩場を登り、頂上にてる。そらって、登山口へ下り、フリソウになった足で車を置転し、なんとか帰ってきた。(河合記)

発 8:45 ~ 9:30 ローリツ岩 14:35 ~

中央稜取付 14:45 ~ 山頂 16:16 ~ 登山口

16:44

7931 甲斐駒 赤石沢 奥壁 左ルビ
係 森下道夫

1979年10月20日~21日

森下道夫、中野敏彦

10月20日(曇のち晴)

尾白荘 6:45 ~ 11:00 五合目 12:00 ~
七合 12:50

出発前日19日には、台風が通過し、ものすごい暴風雨をくらった。そんな中で、なつかしき列車に乗る。大武川から赤石沢をぬけ、奥壁登攀というすまじいルートを考えていたのだが、台風の猛威のため、7700~4は黒戸尾根とした。

10月21日(晴)

発 4:40 ~ 6:00 取付地点 8:10 ~
終 3 16:20 ~ 七合 17:35 ~ 横手 21:50

七合小屋から、ヘッドランプを付け、奥壁へ向う。八合の岩小屋からバンドを下ると、奥壁の真中を左ルビで頂まで登る。のびやかなのにびている。一昨日の台風の雨のためか、ルビ下部には、流水があり、かなり濡れており、さらに悪いことには、うすく氷も張っている。取付までの下降の際、氷ですべった中野は弱気になり、中央稜索を出すが大い天気と森下に所かまえる。結局、状態の悪い下部3ピッチをまいて、オズバンドから上部に登ることにする。オズバンドを廣利支天の方に左上して登れそうな所をエガシ、1Pクラックを登ってオズバンドに出る。オズバンドからの1P目は、流水溝のフェースを右上するが、まだ氷が溶けきらず残っており緊張する。2P目は、A、でハンゲ下を右上して、小はなレシジでビレイする。そこから左下に不安定な、アブミトラバースをして、流水溝に出るが、ザイルの流れが悪くすべりピッチを切る。流水溝内は、比較的がわいており、7、1クションがまくまく花崗岩が44ニードに続いているのは、実に快楽だ。オール

の10m程の岩壁で、傾斜はきつい、ホールディングがしかりしているので、容易に越せる。ひと休みしてから、真教寺尾根をのんびり清里まで下った。(中野記)

7936 躰城・雨鈴山
係 森下道夫

- 1979年12月9日
- 森下道夫, *服部克美(ユバウ山岳部)

小谷温泉 7:55 ~ 林道分岐 8:45 ~
荒管沢 10:35 ~ 終線 12:10 ~ 12:45
頂上 13:00 ~ 15:45 小谷温泉 16:10

• 初冬の雨鈴山を夜行日帰りで行けるか、どうか藪にはわからなかつたが、やはり無玉里であった。列車の接続うまくいかず、両夜行になってしまった。

• 黒沢尾根を、一人の単独行者と共に登る。新雪は深い所で腰ぐらひまであった。新雪をかぶり、目の光に映えるフンゴシの岩峰群には、何か神々しいものがあつた。

7937 甲斐駒ヶ岳
係 青谷知己

- 1979年12月22日 ~ 24日
- 青谷知己, 中野敏彦

12月22日

竹宇駒ヶ岳神社 7:00 ~ 七合小屋 15:15

12月23日

寝 6:00 ~ 甲斐駒ヶ岳 8:30 ~ 五合岩小屋 13:30

12月24日

寝 7:00 ~ 尾白楽谷 ~ 林道 13:00 ~ 自宿 15:00

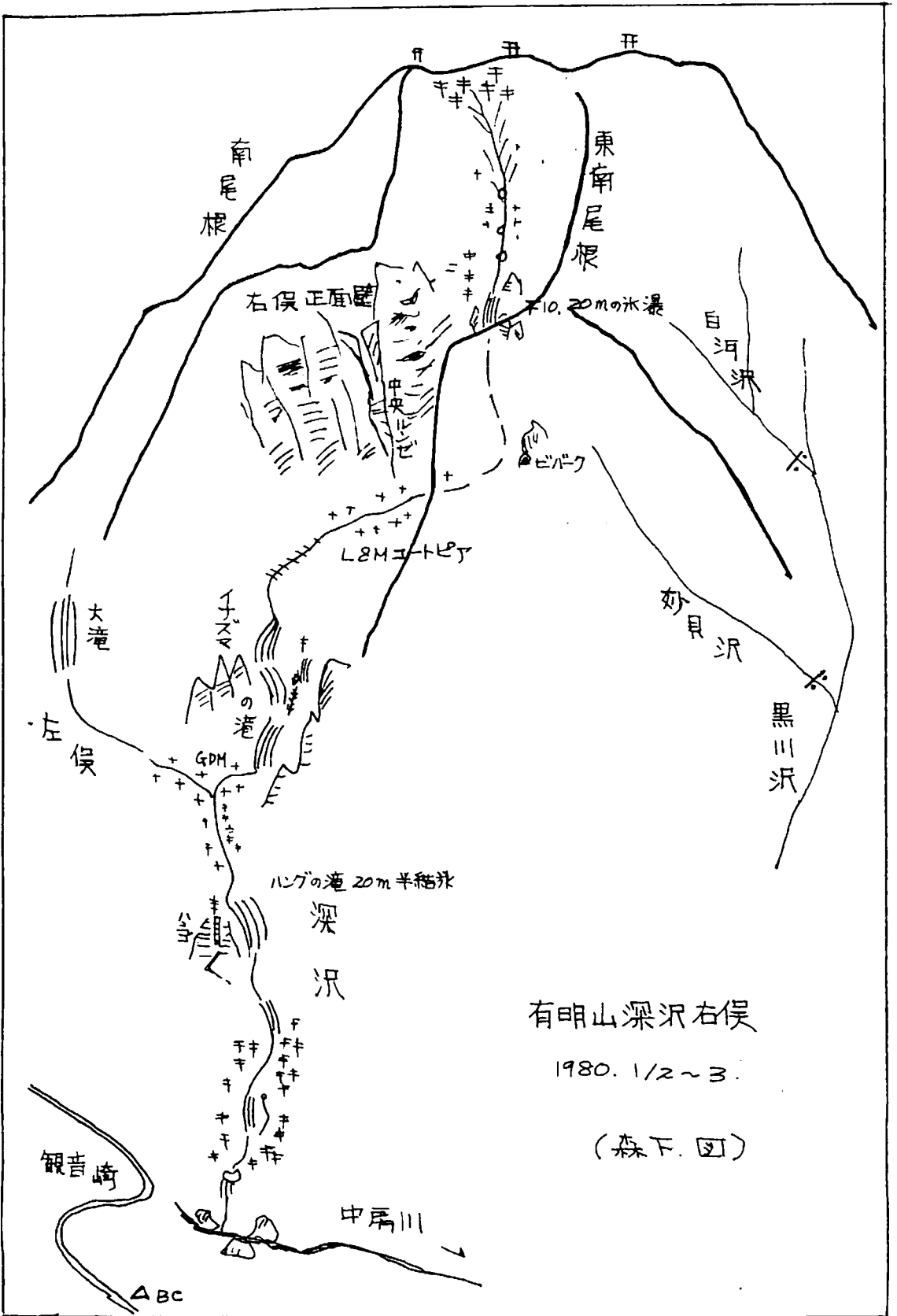
冬合宿の北鎌尾根がつぶれ、代案として、青谷、中野で甲斐駒ヶ岳を目指した。

坊主沢 ~ 坊主中居根 ~ 甲斐駒ヶ岳石沢巒壁中央稜という計画で望んだが、暖冬のため氷結が不充分で雪も少なく、やむなく予定を変更。中央稜に目をしずめた。しかし悪天の氷に決断がにぶり、甲斐駒ヶ岳頂だけに、終った。夕方近くまで天気が持ったので、くやまれる判断であった。五合の岩小屋は天井が低いものの快適である。周辺の氷瀑を捜したが、どれも流水を見るし、判断の基準となる、坊主池も全く不完全であった。下山路にとつた尾白楽谷道は変化に富んでおり、昨夜の20cmの積雪は周囲を美しいものとした。白に映える憂快な滝や、緑色に泡まよどみを眼下に眺めつ、徒歩高橋まをくり返す。金中からトレスあり、助かったが、道自体はきつめて不明なものであり、時間は結構かかる。アゼンガまるくなりもたいなかつたが、所々氷にている所もあれば、仕方ない。やと林道下につけば、トレスも泥のガレを登っており、ひと登りで林道へ。林道を快適に歩けば、2時間たらずでバス停に至ることができた。うおせに聞いていたこの林道を使うアプローチだが、車を使えば、黄蘗谷に入るのには便利だろう。(青谷記)

7939 有明山 深沢右俣
係 森下道夫(単独)

- 1980年1月1日 ~ 1月5日

誰にも憧れの山というものがあつた。有明山は、僕にとってそういう山であつた。なにを思案か有明山に、小首か上げて出たわらびと安曇野にも歌あつた。有明山は古来伝説多く、「天の岩戸」神話より、取放山、戸放山、鳥放山、マモの山体から信濃富士、有明富士とも呼ばれている。その短身肥大が、僕は相撲の荒勢を思いうかべてしまうのだ。登山の歴史は古く、1721(享保6)年、行者と母者たちにより登られた記録が残っており、一時期は、修験者の登山が盛んにおこな



有明山深沢右俣

1980. 1/2~3.

(森下. 四)

われていったようだ。丘時おとずれる人まね
にはり、太古の自然がもたっているようだ。

1979年12月31日

もはやくれもせまり、たせとなくがんと
した新宿駅、偶然、相模に行くという
友人と乗、恰おせ、しほりにやめろ、やめろと
からかわれる。

1980年1月1日 (みどれ)

有明の駅にありたち、夕クシーでオカ4種
電車まで入る。小雪のちらつく中、すべる足
さきにききつけながら歩きだすが、重荷
がこたえ、ゼーゼーあえいどは20分歩い
て休む。おりからみどれまじりの雪となっ
てきて、目ざす観音崎が山の頂まのよ
うに思えてきた。

1月2日 (晴) 9:14とれず

— 1つの夢を夢みる日があれば、その
夢を現に夢みする時もあるだろう。蝶
という動物は、夢を食って生きるというが、山
登りも戸籍全とういものだろう。自分の夢
に酔えはくはるまで、夢は遠もとめられ、
そしてようやくかまえたと思ったら、夢はその
先にあるといった具合で、これは果でもない。
追いかけてきた。変遷をつかす時もあるだろ
う。しかしフランスのある詩人は書いている。
「常に酔っていたなければならぬ。すべては
そこにある、これを唯一無二の問題である。
……」と——

出発のときは、いつもきにちないものだ。
こねから起るであらう色のな事も頭の中を
かすめ、とりとめのない不安と、しかし行かな
ければいけないという気持ちが入り交り、本
当にどいどめがたし、観音崎より、有明山
の麓と森林をはいめぐらした山容を望
み、中庭川にありたつ、くびれた森林の中
を流れる深沢をたどっていく。金中敷
個ある滝は半結氷で登れない。二股付
近は開けた地形で、右岸の小屋根の陰
に、イナズマの滝が登氷となって時空を
ちようこくしている。正面を登ると70~80
mの高差があるかもしれない。どこが弱

点をついて登るしかない。幾分傾斜ゆるい
右方の氷をダブルアックスで10m程登り、ギ
ルをさす。二本より2P、1P目20m右上する
小凹角(ハケン、ボルト4)、2P目25m氷
瀑より急な草付(ボルト1)自己確保し
て登る。手なれたせい、えらく緊張して
しまい、幾度もしゃんしゃんしながらようやく
ぬける。このピッチで時計がとまってしま
った。上部のカリを登り、左方に樹木帯を
トラバースするとイナズマの滝上のマメ状の
小滝に出た。林源郷の様な所だ。イ
ナズマの滝が大まな開門となっており、さ
も恐龍でもぞうな、密林帯のポケットに
ふみまよった太古の人の心もちだ。沢の
右岸は、左俣を分ける屋根の側壁が船
体のような岩壁をはいめぐらしてあり、岸
に行く程立派だ。右俣側壁もしくは正面
壁と呼ばれているものだ。この岩壁は金
中1ヶ所、切れこみを入れてあり、蜘蛛の
すのように細長い氷が岩にはりつくよう
に集った。中央にせとと呼ばれているものだ
ろう。沢がどじているような錯覚をおこす
屈曲点まで、思いのほか長い沢歩きをし
て、夏場は滝である。2.3の雪壁を登
り、左岸の大岩の下をピバク地とした。午
後4時から11まではなからたかと思う。暮
夜、ツェルトをのけると夜目にも白々と、
白いものがまわっているのがあつた。

1月3日 (晴)

新雪がふもっている。深沢右俣はこいで
びんと直前に左にふれ曲り、ちようどすべ
り台のように、高差500mの定傾斜めレ
ンゼとなえ、まっすぐ頂上めざしている。
どのくらいでぬかれるか全く見当がつかない。
膝ときどき腰ぐらいのラッセしをくりかえし
て行く。ときおり、ふり返って見ると、ついでく
るものは自分の足跡だけである。たま
さか、雪の切間よりまばゆい日の光が溢れ
ては、樅の木に積もった雪の一片がキラッ
キラッと輝く。F10に数えられる20mの
氷瀑が真近にせまってくる。滝下の小滝
を1つたりまたり何回するが、結局自分
には登れないとわかり、右壁を登る。

10m程ジリジリ登ると、どうしてもふみきれない所があり、ルンペン打ちザイルを出して空身で登る。小屋根を乗り越え又降り、斜向バンドを40m下へ下り降りし落口にでる。こころより、心は小さく細くなり、間にはえまった大岩や倒木が、度々難関で骨であった。これらをやりすごすと、しじは雪壁帯となるが、これが何とも登り出すと身はしずみ、雪をほらうと、今まで頭をたねていた、かわいた感の空気がビュッと元気がよくなるかえって来て、それをつかんで登るという、ひどく体力を消耗させられる労働となった。あたり暮色ただよい、これは今日中にぬけられぬかと寝床さがしながらいくが、最後石楠花と木の頑強な抵抗の中をくぐりぬけると、細長い有明山の頂稜にた。暮れなすむ中、燕、大天井の山なみが茫洋としていた。

1月4日 (吹雪 後みせ)

昨日は、どこか客所にいい所はないかとさがし、ちょっとしたお宮の相の上にはいずりあがり、夜を明かしたが、寒くて眠れず、その上羽毛服を白無しにしてしまった。今日は下山といっても道ははつりしてあらず、鋭目、テアをたよりに、ぼ倒的な樹林帯の中をくぐりぬけて行く。中房温泉につく真雪はみせれとなつて来た。とほとほ観音崎をめざして歩いていくと、あとに不安半分期待半分までと行った時の事、無事途中で氷瀑を登った時のこと、心細かったピルゴのこと色々思い返さえてきて、あわい気持ちにひたりながら行く。

1月5日 (晴)

行きとうらはらに、山荘のジゴに車寄せてもらい、松本まで行ってもらった。日華楼でビールをたのむと、ラベルに賀正とあり、しみじみ年が明けたのだなあとその時、実感した。——

信濃なる有明山をめぐりにみて

心細野の道をこそゆけ

(西行)

17940 八ヶ岳 赤岳 横岳 西壁

係 青谷 知己

- 1980年1月12日~14日
- 青谷 知己、中野 敏彦、藤岡 毅、井波 重弘

1月12日 (快晴)

横岳西壁無名峰南稜 (青谷、中野)

美濃戸口 6:25 ~ 10:10 行者小屋 11:10 ~
取付 13:15 ~ 横岳 17:00 ~ 行者小屋 18:00

今回は新人のために雪山合宿を行なった。無名峰南稜、石尊稜とZパーティに分かれ登る予定であったが、井波が取付く前に、不調を訴え、時間的な制約から、青谷、中野2人で無名峰南稜へ行くことにした。三ノ峰心せから、尾根めがして雪壁を無理矢理登って取付き、尾根に出たところでアザイルした。ブッシュ混じりの尾根をラッセルしながら登る。横に枝が伸びた大きなダケカンバを越し、右の凹状壁に行く。雪がうすらっているスタンスを拾って10m登り、左の方へ不安定な木の枝をつかみながら上り、せまい所でビレーした。ブッシュ混じりの雪壁を登ると、再び雪壁になる。最後の岩壁には、20m程の仏ニー状のクラックがあり、そこを登って左のハンク気味の所を越えると、横岳まですぐである。天気が良かったため、日が沈むと急激に冷えはじめ、暗い中ヘッドランプを付けて、縦走路から地蔵尾根を経て行者小屋まで下った。

1月13日 (曇のち雪)

赤岳西壁主稜 (青谷、井波) (中野、藤岡)

尾 7:10 ~ 取付 8:40 ~ 12:00 赤岳 12:30 ~
行者小屋 13:00

赤岳沢をつめ、赤岳主稜へとZパーティで向かう。一般的な取付より手前で、右側から入る雪壁から取付く。青谷、井波パーティが先行するが、慣れない井波が登攀中にアイゼンをはずすなどして手間どる。2p目もハンク気味

の4ツツストーン道をボルトをつかんで左から越えるなど、新人にとっては、やや苦しいスタートになる。道の上で左からくる一般的な取付からのルートに合流する。これ以降4P程、容易な岩稜、雪稜が続き、岩壁につきあたる。右側から越え右上すると2P程で雪稜となり頂上に至る。

1月14日 雪

尾 8:00 ~ 中岳とのコル 11:00 ~ 行者小屋 ~ 美濃平

青谷、井汲は前日下山し、残った中野、藤岡と、権現岳へ編笠山と併走する計画だった。前日からの雪で撤収に手間取り出程が遅れる。文三郎道の途中から藤岡が、足の不調を訴え、コルまで上がったが、境界を悪いため、併走は断念し下山する。

(中野日記)

17942 裏妙義、谷急山、入山川、ホトケ沢
係 森下道夫

- 1980年2月3日
- 森下道夫*、服部京美(ユニツク山荘)

横川 8:07 - 8:45 F下 9:00 ~ 稜線
13:10 ~ 13:25 谷急山頂上 13:45 ~ 明礪 16:00

- 氷の川となつた、入山川を二おろし渡りF下にかかる。Fは10m程の氷瀑。道中は、河原状で所々小滝がある。
- 大滝前の10m程の氷道は、傾斜もまっく、氷が岩にはりついている感じで登れず左壁のバツドを登る。背後に明るい懸崖、高岩がなかなかならぬ。のどかである。
- 大滝は下部が広くゆるい30m程の氷で、上部15m程は垂直に近い。高橋な技術が必要としよう。右側をまく。
- 道中は150m程氷のスベリ台で、アイゼンのキリキリが響くと、歴然とした差になつてあらわれる。オロロシイ

• 急な樹林帯をぬけると、谷急山山頂まで、すじじい。嶺越たる表妙義、空程が和歌山、山、重なる浅間山など、指呼の間だ。

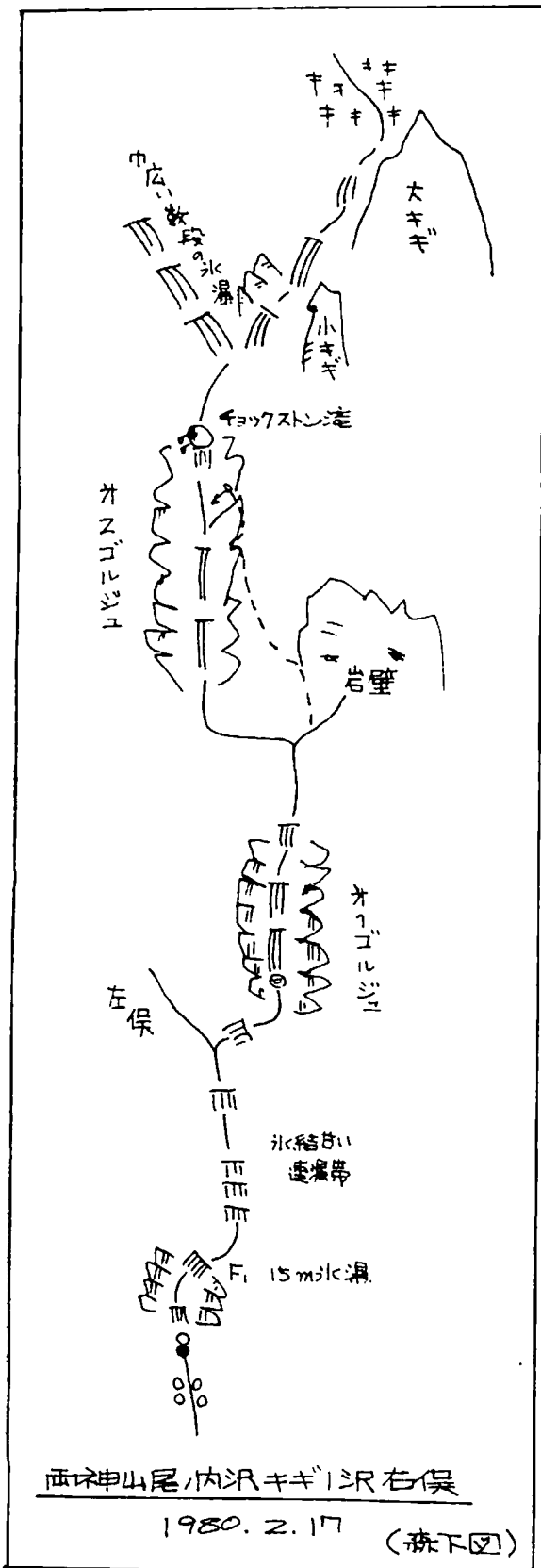
• ホトケ沢(真谷急沢とこける本もある)は、氷、雪をみることなく、ふみしめるものは、氷と岩と落葉。道ばかりで、氷遊びとしては、つまみづまりしていると思う。

17944 両神山、尾内沢、キギ沢、沢右保
係 森下道夫

- 1980年2月17日
- 森下道夫、青谷知己

尾内 8:00 ~ キギ沢 出合 9:30 ~ 稜線
16:00 ~ 尾内 18:45

朝一番の西武秩父行に乗り、777-をよびして、尾内に至る。天気は快晴、朝の冷気は、氷瀑登攀の期待とともに身が引き締まる。水量の減った尾内沢を何度となく、渡り返し、人跡のあまりない川道を進む。次第に両神山の稜線系が迫れば、出合はゴロの押出してあるキギ沢に至る。付近はうすうす雪がこぼれている。期待と不安の中、巨岩地帯をしばらく行くと、果して氷瀑があった。さっそくアイゼンをつけ、両手にハンマー、ピッケルを持って氷に打ち込む。久しぶりの感触に感激、2人とも思い思いに小氷瀑を越えて行く。F15mは見事な氷瀑、階段状のためあがり越える。まだ下部のゴロは水流があり、氷結が不十分ながらも選んで登って行く。10m程の緩い氷瀑をいくつか越えるとオ1ゴルシュに至る。息に向きを変え、10mの4ムニ-状がその始まりだ。ここでザイルをだし直登を試みる。青谷が1、2歩登って降りると氷が割れて、中足が木の中、気分を取り直し慎重に取付く。薄い氷で出口にてこずる。一担テラスとなり2段目はみごとな氷瀑15m、ピッケルを打ち込み2m直上、スタンスを切りスクレーパーをもち込む。以降打つ余裕なくダブルアックスで切りぬける。



2P目は、7m薄氷瀑を越えるとコルジユを
 板ける。ガイルを解きしばらく進むと、オズコ
 ルジユ。オの滝は氷も発産しおらず、出口が
 かなり気味のため断念し、右側の川やらしい高
 巻きをする。オ3の滝上で沢に懸垂したため、
 チョツ石ノ滝はヒンズ本付でアブミで苦
 辛して越える。この辺で寝れが出てきたが、10m
 前後の氷瀑が次々にあらわれてくる。上部
 に行くに従い氷も固くなってくる。ダブルス
 クスにも飽きて、あえて氷を吐けるようにもな
 ってくる。夏登れない滝も氷が引かれ、皆
 直登できるというわけだ。傍線直下まで続く
 氷瀑をやとやりすごす。夕暮せまる秩父盆地
 を一望する東岳を越え尾内沢沿の道をと
 る。道は荒れており、かなりのアルバイトとなる。
 キギ沢合流付近で暗くなり尾内に出た
 のはバスもなくなった7時近く。幸い車が
 13台、小鹿野までのせて11台もらった。
 東沢や松木沢のように人気のあるゲレン
 だだけでなく、時期と沢を選べば秩父、
 嵐多摩でも充実した氷瀑登攀が出来よう。
 キギ沢はそれを見事に実証してくれた。
 誰も対峙することのない美しい氷瀑に、我
 々だけのステップを刻んだ。氷と戯れた、
 楽しい日であった。

(青谷記)

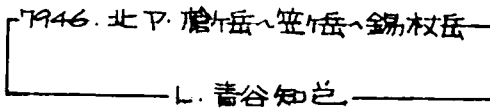
7945 西神山河原沢行者坊ノ沢
 係 森下道夫

- 1980年3月15日
 - 森下道夫 * 服部克美
- 3月15日(晴)

坂本 8:00 ~ 8:40 行者坊合流 8:50
 ~ 傍線 12:45 ~ 11T峠 13:10 ~ 坂本
 ~ 納宮 16:05

2万54分の「西神山」をみると、行者坊
 の沢は、傾斜と川、向いている方面と川
 必ずや素晴らしい氷谷となっているにちが
 いないとでかけた。(この時、飯野舟の「西
 神山」をみて11日は、多分でかけたかたで
 あるら) 11T峠への一般道より、沢に入る

とすぐ二俣となる。右俣は 険壁が 真近く 望む。本流らしき左俣を行く。行けども道は一向にぞこない。兩岸まじったし字谷となり。あまりめまれの川を持ちて稜線にぞた。この沢は一般の下降路にもつかえよう。行者坊周辺では、右俣の 険壁を登り、左俣にあり立ち所が川の切戸より西岳尾根のけんちよな岩峰に登るルートが 興味ある所だ。蛇足ながら、河原沢支流タツマガ 滝は40~50mの氷瀑を見せてあり(坂本より小30分)。冬場双子山に岩登りにまた時など、一時立ち寄ってみるのもよいだろう。



- 1980年 3月17日~25日
- 青谷知己, 中野敏彦, 河合爲樹, 上遠野浩.

未知なる山々は、新鮮な感動と喜びをもたらしてくれる。笠ヶ岳周辺も通った北平のそんな一面であった。今回の春合宿は、北平の縦走を行なったから、又新人の参加も考慮しにの地味を確定した。昨年来、新人の冬、春合宿の参加が極めて少なく、今季の冬合宿も満足に行なえなかつたため、多くの参加が望まれたが、結局新人1名を加えた4人編成となった。春合宿と呼ぶには、林山限りであり、皆に発奮を望むとともに、次期に不安を残したことは、リーダーの至らぬ士を痛感するところである。又合宿の立案に際しては、上級者と新人、社会人と学生の折合を考え、より多様性を富ますことで、西月の冬季における会としての強さが引き出されることだろう。さて何はともあれ山行自体は極めて順調ですばらしかた。縦走に加え錫杖の登攀(前衛左→右ルート)が条件に恵まれ達成された事は、3年にとって一層充実した山行となった。後半の縦走は3人であり、軽量化の結果各自30kg以内ですみアタックがわりと事足りたので、行動は一層スムーズになったと思われ。上遠野は槍ヶ岳まで行

動を併にし、飛騨沢をスキー滑降した。

3月17日

上野総合宿参加者4名に倍する人数の見送りを受け、久しぶりの富山回り気分も新たに出発。

3月18日(曇のち晴)

新穂高9:00~白出沢出合11:40~滝谷出合14:30~槍平小屋16:20

槍平小屋に登攀具をデポしてから縦走に入る。白出沢出合までは林道上のルートを走って快き間。上遠野はスキーで進む。白出~滝谷間は部分的に右側からデブリが生じており注意しながら行く。滝谷の岩壁群を仰ぎつ、いさか疲木の出た頃やと槍平に到着。人より大いなり雪原の片すみで設営する。

3月19日(快晴)

槍平5:50~中嶺尾根上8:15~千丈沢乗越(10:30~12:00)~槍ヶ岳13:30~帰幕15:00

今日の天気は絶好。雪山の楽しい日が展開されるだろう。新大山の直登はアルピットであり、雪の仕度も良いので飛騨沢を進み、大曲り付近から中嶺尾根に取付く。ワカンを付けた時々出るラッセルに苦しみつてもIPで稜線へ。微風快晴。これからたどる西嶺~笠、そして穂高の山々が指呼のうちに展開する。尾根をしばらくたるとれば、ジャンクションP下へ広がる大雷面。岩稜を避け右上にラッセルを繰り返す。西嶺尾根上に立つ。ピークの肩にへばりつくように、天幕を設営する。昼飯の後、槍アタックに出発。槍の穂先は一応ザイル、三ヶ道目を持っていくが、要所には固定ザイルがあり、クサリ、ヒゴ等も出ているので、容易に頂上になった。夏の喧噪もどこいやら、我々3人だけの静かな絶頂である。上遠野は小屋の周辺をポーズつけてあちこち滑った後、飛騨沢の大斜面にその大壁に比してあまりに小さい点となって1本のシュールを描いた。

3月20日(曇のち晴)

発6:00~大マ乗越12:50~槍ヶ岳14:30

天気が心配であったが、とにかく双六まで行けばの気持で出発する。上遠野とはここで別れ、ここから

の難きを思いぐつと心が引き締まる。やせた尾根だが特に危険もなくいくつかのピークを越える。風はあるがまだまだ北アの厳しさではない。横沢岳を越えてから、天候は好転し、稜線は光輝く。広々とした淡々とした尾根に、今日の泊場大ノマ草越を越え素晴らしい大雪原、秩父平に歩を進めた。

3月21日

発 7:15 ~ 11:30 笠山荘 12:30 ~ 笠山荘 12:50 ~ 7川マの頭 16:20

さすがに天気も厳しそう。11毛通り走り出したものの飯を食ってから、周囲の暗雲に慎重を期して様子を見る。1時間もたつと、あつという間に晴れあがる。横沢の稜線には雪崩そうなる急斜面トレスのトラバースはとてまたどる気になれず、直登したが返ってやばいトラバースを強いられた。稜線に入ってから、ガスがこくなりだし、左側の雪庇に気を配りつつ黒い点とわかる岩角やイ松を確認しつつ進む。横沢岳らしきものを確認しこのまゝではまいったなあと思つたが、晴甲の強さか1つのまにか、そのガスも切れ崖が眼前に姿を現わした。これ以降は稜線慢歩、左側に槍穂をながめつつ、真白な笠ヶ岳は次第に近づく。肩の小屋でランチ、小笠を踏んでから大笹の絶頂へ。ケルが2つ3つ360°さえるものな1素晴らしい頂だ。新鮮な眺めである。求める錫杖ははるか雲の下に見え隠れ。くさった雪に難装し雪庇に気をつけながら下り、2つのピークを越えれば、7川マの頭も近づく。雪が いいので、ここに幕営とする。

3月22日(みぞれ)

沈殿 気温が高くみぞれが終日降り続く。

3月23日(小雪)

発 8:50 ~ 錫杖岳 13:15 ~ 45 ~ 南峰 15:10

朝から雪が舞っていたが、やや視界がよくなってくるのを待って出発。降雪後なので今日は無理をせず、沢の下降点までとする。ここからの稜線は人の気配もなく地図にとらめっこだ。蘆刈材草に苦しいラッセルを続ける。視界のきく時を逃さず、遅々とした前進である。真似父的な奮闘気がたつたよう。おれども

1つの目的としていた錫杖の頂上に立つことができた。稜線をたどっていくが、岩が露出してあり、やっかいなので、P3、P4とおぼしき岩場のすそをまくことにしたが、これがとんだまちがい。雪崩そうなる沢を下り、河合が滑落したりして、さんざんのすそをまきの末、下降点にたどりついた。

3月24日(快晴)

発 6:10 ~ 錫杖沢出合 7:00 ~ 8:15 ~ 槍見 8:55 ~ 岩小屋 10:40

横沢沢を駆け下る日。星空で冷えるみも、充分条件は何よりである。夜明けとともに、競争のようにつけ下る。下降点はマツリが出たが雪崩れる気配はなかった。周囲の雪をまとった岩壁群が朝日に輝く様子は全くすばらしい眺めであった。7川マの岩小屋に天幕を張り終えた後、下山する河合を槍見まで送り、テントを回収してくる。目ざす3ルゼを偵察し、登攀意欲がたつる。ここを登らないうちは帰る気がしない。

3月25日(快晴)

発 5:35 ~ 6:05 取付 6:30 ~ 10:15 終了点 11:10 ~ 11:45 岩小屋 13:15 ~ 槍見 13:55

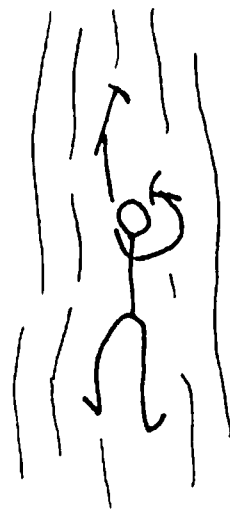
錫杖岳前衛左一ス 3ルゼ

様々な登攀記録を眺めにつけ、スノーシューに耐える体力と凸所が重要とあり、ピルック覚悟の準備をする。でもおれは明らかに総取り温泉1行とぞという意気込みのもと日の出と同時に岩小屋をあとにする。30分程で3ルゼの基部に達する。夜明けの明るさに、氷雪壁がルゼに伸びあがっている。スノーシューの落ちる様子もなく静まりかえっている。ニルゼ側の大木が折れた地点をふみかためピル点とする。並んだ川首序に伏し、書谷トリアとなり、静かに登攀準備をする。この瞬間、不守は若し僥んで、意欲と自信が沸き沸きしてくるのだ。ピル点、はしっかりとろうな。中野と11毛がある言葉を残してカ1歩をふみ出した。5.6m 石上して中心部へ入る。キックステップのきく50°ぐらいの雪壁で、雪崩道はアゼレの出っ歯がよくきく。ザイル1つはいでピル点に届かず

確保点をずらしてもらい、F₂下の岩にピンを打ち込み1目を切る。ここまでは容易だ。氷瀑が2筋になって落ちるF₂は右側をとる。雪壁後80°ぐらいの氷瀑となる。中野は氷がなぐられる。ため手こずりながらも越えていく。いざ又するとピレ解除の音。氷は慣れたつもりがかなり悪く、ハンマーは土埃らず、ボルトはこぼれていく。ツツラの間に手をつかみ、おさるおさる抜ける。ニヤまいったまいったという感じであとの雪壁をダブルアックスで心を落ちながら行く。こういう所はトップよりセカンドの方がどびる。F₃も氷瀑だが、垂直に近いやばさうなので、左壁にルートをとる。ピンにアビスをセット、慣れぬアビスに手こずりながら、めたやたらに氷を落とす。意外な所からピンが顔を出す。こうして10m程ザイルを伸ばすと、雪壁となり、微妙なバランスを乗り越し3目を切る。この頃から、ツツラ爆弾が落ちてきて、時々中野のメットがゴーンと音を立てている。中野も手こずりながら越えてきた。ニは雪壁をトラバースして又中心に入る。この辺の雪壁は固くコンクリート化されており、ハンピッケルとアビスの前爪のコンビネーションによる、快適な登高となる。アビスの氷壁に近いかななんて思って、楽になる。F₄はチョックストーンで、見事に土穴があいている。これも枝口にハンマーとピッケルをさすことで、意外と楽に越えられる。写真を撮ろうと思ったが、この時にかまうてスノーシャワーの連続。中野はピレ点で雪まみれ、仕方がない。5目F₅の登壁から始まる。ニは最悪のトラバースを強いられるところだ。一段氷を使って登り、雪に無縁りとなり、左壁の薄氷氷瀑にスラックを張り、その上は氷雪壁タガ-ホジションで登る。ザイルに余裕がありF₆に取付く。左壁にボルトがあり、ニはこれを使わせてもらう。2,3回かけて、落口にはいる。上がる。と急に明るく開けて、終点のコルが目の前に開ける。「あれ、もう抜けちゃったの」という感じ、ピレ点がないので、雪壁を掘り下り、ピッケルを打ち込んでピレする。最後の雪壁40mに気がゆるんでいけないと思ってるから、「写真とれや」という感じでポーズをとって行き戻りつ。帰。

がありゆるみ出した雪壁を少しとれば、明るく帰る終点だ。終点10:15。なんと3時間45分。完登した喜びとともにあつなえが入り交り、せめてあと2〜3pと思えば……。背後には槍穂、燭木の接線が見え最高。春合宿も終わったという満足感とともに、慎重に下降にうつる。シュリンゴの束を見かけ、そこからアブザイル20m。雪壁をトラバースして、尾根を乗り越し反対側のルンゼ状を下る。夏ならアブザイルだが、今は悪雪の雪壁となっており、何なく下ればあとは樫木のあるゆるい斜面がクイヤ谷まで続いている。雪崩もたかろうと、シリセードでぶつとばせば岩屋に3分着いた。まじ午前中土まじく天幕をぶつこおし、温泉めがけて出発。すでに春の陽気の中、商売一筋のない槍見温泉ではなく、西穂館とゴウレイ。この優雅な下山もまた新境地ならぬ。

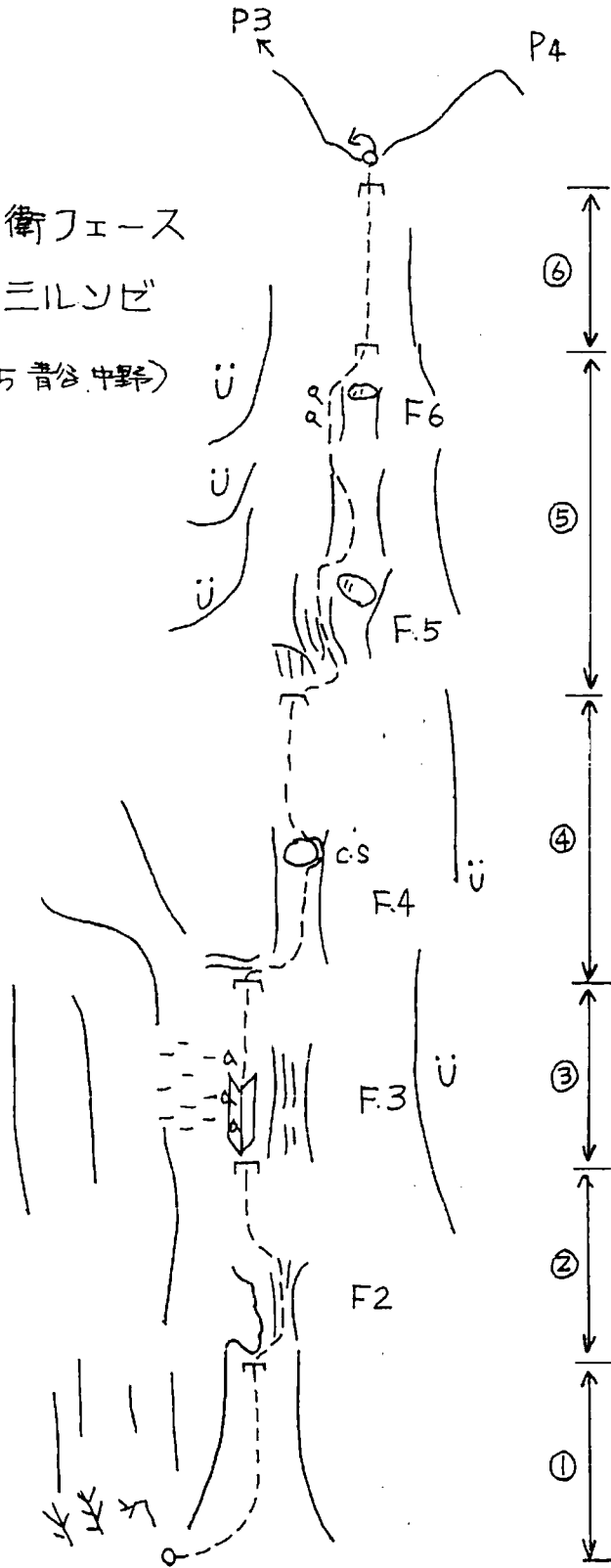
(書谷吉記)



錫杖岳前衛フェース

三ルンゼ

(55.3.15 青谷中野)



50m

雪壁

40m

氷瀑 3m

雪壁

左壁を人工で抜ける

40m

雪壁

C.S.を抜ける

20m

左壁人工へ雪壁

30m

氷瀑 7m

雪壁

40m

雪壁

(青谷四)

1980.4 ~ 1981.3

山行記録

会長	上藤野 清
4-リーダー	森下 道夫
サ-リーダー	青谷 知己
〃	中野 敏彦
例会係	河合 秀樹
会報係	森下 道夫
会計係	中村 正俊
〃	井汲 重弘
装備係	中野 敏彦
西高係	松本 哲郎

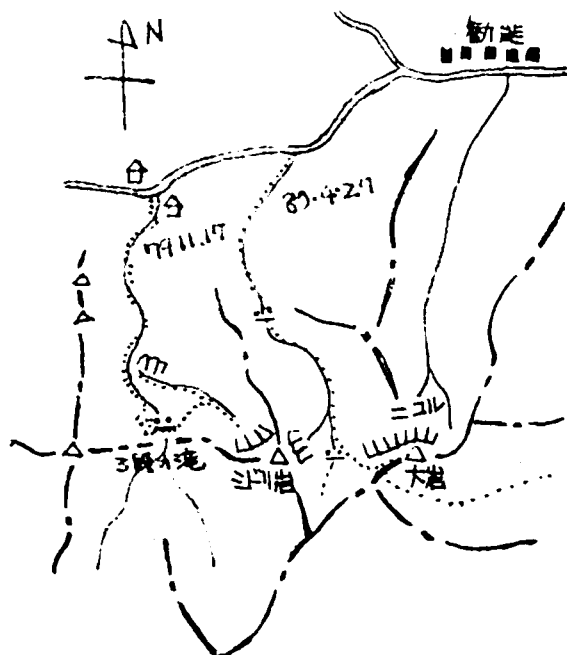
西上州、大岩

森下道夫(単独)

● 1980年4月27日(晴)

下田＝新能(9:50)ーF上(10:30)
ー右ル走往復広野原(11:30)ー30m道
上(12:30)ー広場(13:00~13:15)ー大岩
(13:25)

- バス利見た、極小トラドシラス大岩ミドリ岩が忘れられず登りに行った。
- ミドリ岩は3段の滝側とともに150m程のミドリ岩がたつ奥壁をもつ。大岩も岩壁をもつ。
- 最後の滝30m左側四角を空身になり登ってからザイルで荷を上げた。(オパールグア)岩稜2つ程越えたと細長い大岩の頂上。下山は茨沢川の沢に求めたが途中ヨリ左岸に山道あり、何いもよめたお代新能に出た。



シロ・大岩 1/25000 十石峠による

上越、荒沢山東面

森下道夫

● 1980年5月3日~5日

● 森下道夫、山野裕、中尾伸二、中野敏彦、井坂重弘、河合秀樹、藤岡毅、宮崎洋一、斉藤健志

5月3日(快晴)

● 足指子本谷~コソド~荒沢山・前手沢

- 森下、中野、井坂、藤岡、宮崎、斉藤
- 本谷は谷川岳一帯一沢のような所
- コソド・荒沢山の稜線は両側がマレマレで、結構いやらしい。

● 足指子絶木の沢

- 山野・中尾・河合他西高生

5月4日(晴)

● 国穴スラブ P 中尾、藤岡

取付 10:00 ~ 国穴(11:30~12:00) ~ 稜線 12:54

- 取付けの目印となる御用松の所がハイダン状のスラブが長く続く。
- TIPで国穴につく、非常に大きな穴がある。
- 全体で9Pで終る、3級下ぐらいのグレード、ヤブなく明るいスラブである。(中)

● 2の沢マイリッジ P 森下・宮崎
井坂・斉藤

取付 10:00 ~ 終3点 13:15 ~ 稜線
14:00 (森下Party)
17:00 (井坂Party)

- 2の沢マイリッジは、日本的なリッジ登りを味わせてくれる、面白かった。

● ダムトスラブ P 中野・河合

● 河合・体調悪く ZP 程度まで中且

5月5日(雨)

● 前衛スラブ P 森下・中野・井汲・
斎藤

● 雨のタメ金中ヨリ引返す。

— 奥秩父東沢西ノナメ沢 —

— 森下道夫(単独) —

● 1980年5月11日(晴)

西沢バス停(8:00) — 西ノナメ沢出合(10:10)

石尾根(13:00~13:30) — バス停(16:40)

● 西ノナメ沢下は、非常に気持ちの良い
スラブ途中3m程足が空ず、ハダシで登る。

● 直ぐ丸山東壁をズンブリさせたような岩
壁あり、上部は所々雪があった。

● 西沢の支流・興味あるものがありそうだ。

— 奥秩父東沢東ノナメ沢 —

— L 森下道夫 —

● 1980年5月18日(雨・昼ヨリ晴)

● 森下道夫・青谷知己

西沢バス停(6:00) — 東ノナメ沢出合(8:30)

) — トサカ尾根(12:40) — バス停
(16:45)

● 雨のタメ下は氷積会ル+を登る。3段
目、マンルさする所がMライト、下は250
m 白々と木がスベリ難キリガミエシ。

● 尾根に出る手前は傾斜のキツイヤブ。

● トサカ尾根はよくルートをみないと
まよふ。

— 西上州東福寺川 —

— 森下道夫(単独) —

● 1980年6月1日(小雨)

神前原(9:50) — 二保(11:15) — 神ノ原(12:50)

— 神ノ原(13:50)

● 東福寺川は西上州の沢としては
岩盤の露出もケンチゴであり、楽し
めると思ふ。

● 下部ノミで終ったが上部はかな
り漣場があるまよりに思える。今
後、課題としたい。

— 奥只見・浅草岳・鬼ヶ面山 —

— 松本哲郎(単独) —

● 1980年6月15日(晴)

田子倉(6:55) — 浅草岳(10:05) — 鬼ヶ面山
(12:10) — 田子倉(14:50)

● 鬼ヶ面山の東面のいぼは面白そう。上部の
岩壁は100m程のものだが、いずれも
登って、ポルトの建打か。(M)。

— 谷川岳幽ノ沢滝沢 —

— L 森下道夫 —

● 1980年7月6日(雨とほとんど豪雨)

幽ノ沢出合(4:50~7:10) — 大滝下(9:00)

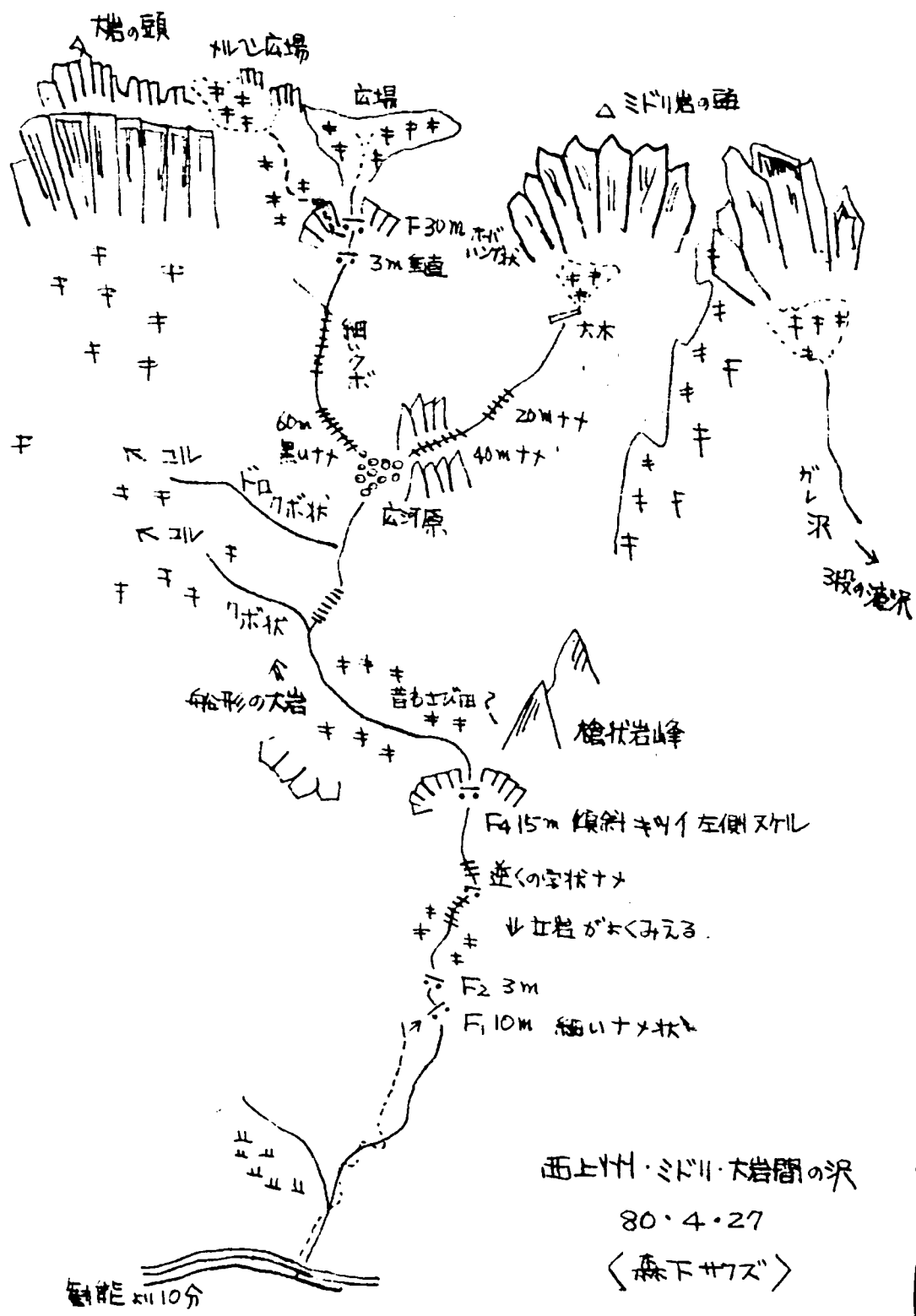
— 大滝上(11:30) — 堅炭尾根(

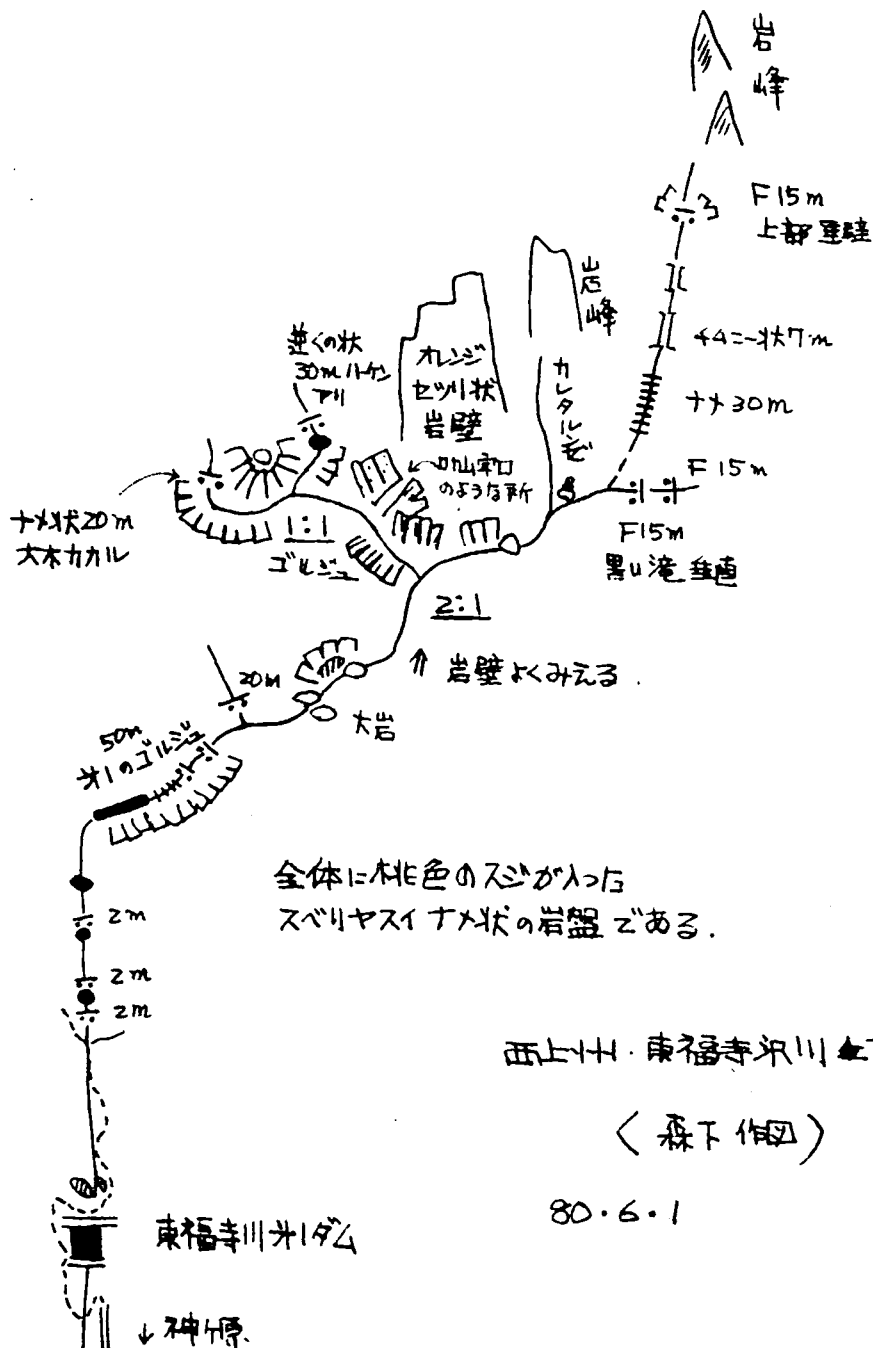
— の倉岳()

● 森下道夫・松本哲郎・青谷知己

● 今年は雪渓の状態は例年より1ヶ月
程多く、下部の大滝も2.3mしか出ていな
かった。上部雪渓は溪流タビに、タゲルア
スで登った。

50)





- 大滝はコンテも含めて5P. 約200m. 4P目40m IVは豪雨の中. 左側スラブ. 7ラックを登る悪い
- 大滝上部10m程の滝を3つ程越えると. 左より奥壁1m程を入れる. 下部スラブ状で本流より面白そう.
- 本流は小滝が続き. 堅い尾根1800mに出る.
- 茂倉新道は. ぬめった赤土の坂が続き. 非常によく滑る. (森)

西丹沢モウゴシ沢

係 藤岡毅

- 1980年7月13日(雲)
- 藤岡毅, 井汲重弘, 河合秀樹.

小川谷出合(5:30~7:00) - モウゴシ沢出合
8:30 - 大滝(F1)下 8:31 - 大滝上(11:30)
[21°待ち] - 奥の二股(12:30~13:10)
小川谷出合. 18:10

- 大滝下段は左側草付クワックにそって登る. 上段はピナクルの左から登り. ピナクル上に立ち. そこから瀑水をかぶりながら直上. 落口直下はシュリンゲに足をかけ. 強引に登る.
- ここから奥の二股まで小滝連続. 沖の悪場12m滝は. 右側を強引に登る.
- 源頭はボロボロの岩. 稜線上はヤブコギ. 迷いやすいので注意. (河)

上越大源太山弥助沢右股

森下道夫(単独)

- 1980年7月13日(晴)
- 剱峰村(5:30) - 弥助沢Z股(7:00) -
稜線11:00 - 大源太山頂上11:50 -

- 本来. 北沢へ行くつもりが. 青年の道コースをとってしまい. 弥助沢を登ることになった.
- 下部のゴルジュ帯. 上部以外. 小滝多く. 倒木も多く. スッキリしない.
- 稜線に出るまでは. ヤブコギというか木登り. 稜線上はカスカナ. 3. 6. あり. 旭原からみる大源太山は. 塩見岳を思わせるが. 天然礫岩ともいえる岩峰は. いやらしい登りになる.
- このあたりはトンボが多い. 丸沢は. 上部から見る所では. あまり期待がもてないように思えた.

上越武能岳武能沢

森下道夫(単独)

- 1980年7月20日(快晴)
- 土合(4:45) - 武能沢出合(6:15) -
連瀑帯上(9:30) - 武能岳頂上(11:00)
- 麓峠(12:00) - 土樽(14:10)
- あまり記録を見ないし. 快的そうなので. 登ってみた.
 - 武能沢は中流域まで. 10m~30m程の滝が10数個あると. 見られ. 傾斜も強く. 逆層気味で. すべりやすい岩質である.
 - 上部は下からみると奥壁状に見え. 不安になったが. 岩峰間をクボ状になってつきあげていた. 頂上直下に出る.
 - 武能岳よりみる. 抱キカエリ沢は. 実高400m. 3段で. 湯松曾川に落ちているが. 直登は非常に興味もてる.

上越仙倉谷支流大カ沢大滑の白板

係 森下道夫

- 1980年7月27日(曇)
- 中村正俊, 森下道夫
- 土樽(7:30) - 大カ沢出合(8:10) - 大滑の白板下(9:10~10:00) - テーブルストーン状上1P(11:50) - 出合(14:00)

大滑の白板とは、仙倉谷左岸大滑沢右岸タカマタギム支線1388mヒークにつきあげる浅いルンゼに展開されるスラブ帯をいう。実高300m程度、登高距離600m程度、幅60m程のスラブ帯が浅い屋根によりわけられ2つある。上越線湯沢と土樽間から上部がステキによく見える。

ザイルを出した所は2P、ルンゼどいに応突ヒルトをとると、かなりキビシイスラブ登攀ができると思う。

巧み勝手に登り、のんびり昼寝をして帰った。

北ア 雲ノ平周辺

係 糸原弘子

- 1980年7月23日~27日
- 糸原弘子, 菊谷佳子 他3名
- 7月23日(晴後雨) 折立(8:55) - 三角点(11:00) - 太郎小屋(14:30) - テント場(15:20)
- 7月24日(雨) - 停滞 -
- 7月25日(雨後曇) 太郎平(9:30) - 葉師沢小屋(13:35)

- 7月26日(晴後雨) 髭(4:40) - 雲ノ平(12:00) - 三俣山荘(16:40)

- 7月27日(雨後曇) 起(4:30) - 双穴(9:30) - 鏡平(13:00) 7サビ平(17:30) - 新穂高温泉(18:50)

槍ヶ岳北鎌屋根~穂高合宿

係 井汲重弘

- 1980年7月25日~31日
- 井汲重弘, 河合秀樹, 穴戸泰成, 百藤(建) 28日より 藤岡毅, 宮崎洋一, 久米祐一郎 他西高生2人

- 7月25日(晴) 七倉(6:20) ~ 湯俣(12:40) ~ 4天出合(14:00)

- 7月26日(晴・午後より雨) 髭(4:25) - 北鎌沢出合(8:10) - 綾線(12:45)

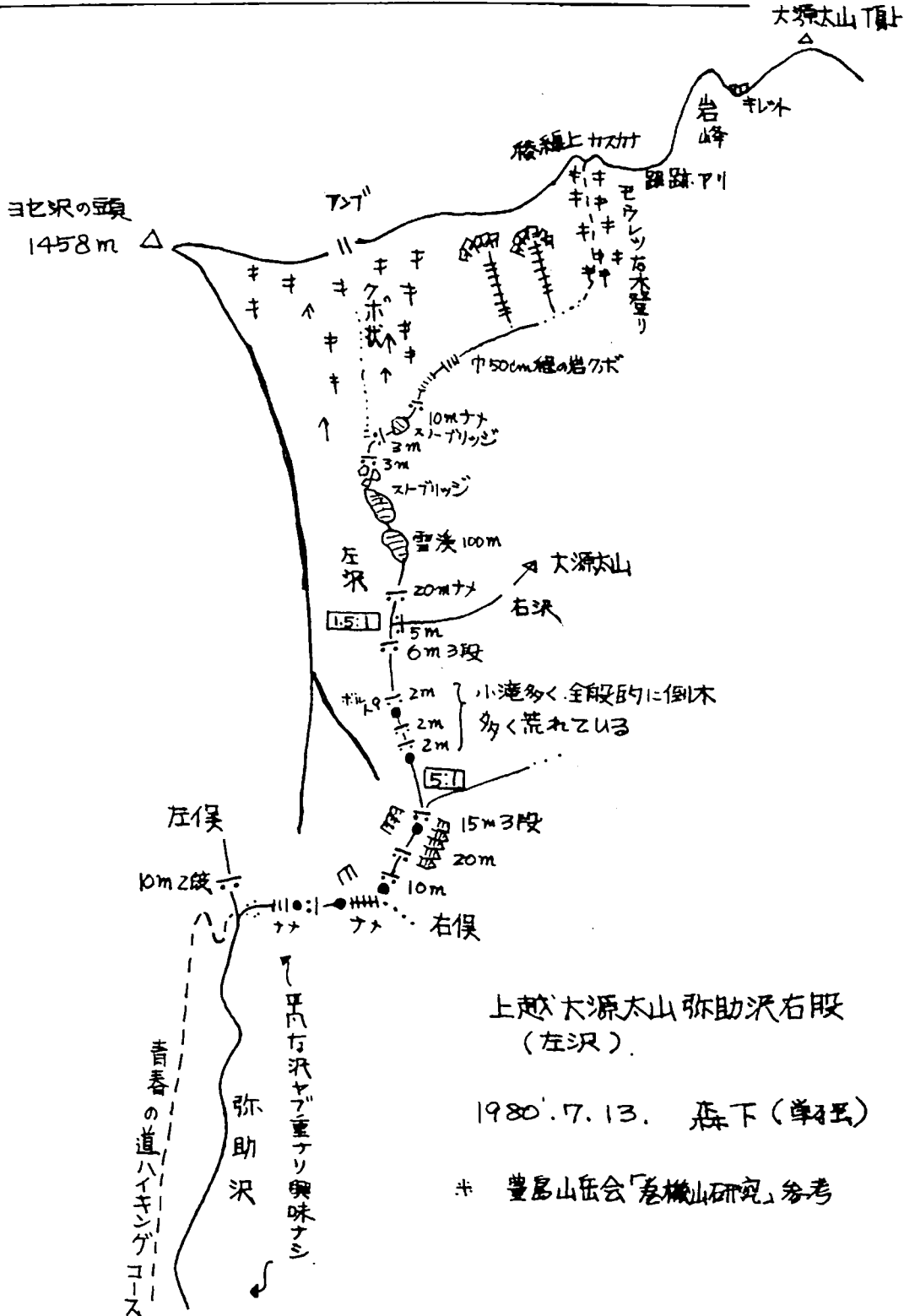
吊り橋が落ちていたのでザイルを1本フックスして1人1人空身で、ガックはザイルに通して渡った。北鎌沢出合から綾線への登りも、暑い上に上の方は、草をつかんで登るなど、急傾斜で、アゴがでた。

- 7月27日(朝雨のち曇) 髭(7:25) - 獨標(11:30) - 槍頂上(16:15) ~ 殺生ヒュッテ(17:20)

獨標下のトラバース、槍直下のムニ - 2ヶ所 でザイルを出した。

- 7月28日(晴午後より雨) 髭(6:40) ~ 南岳(9:15) ~ 北穂(13:35) 久米, 藤岡, 宮崎と合流

10) 11) 14) 15) 16) 17)



上越大源太山弥助沢右股 (左沢)

1980.7.13. 森下(単行)

* 豊島山岳会「巻機山研究」参考

武能岳頂上

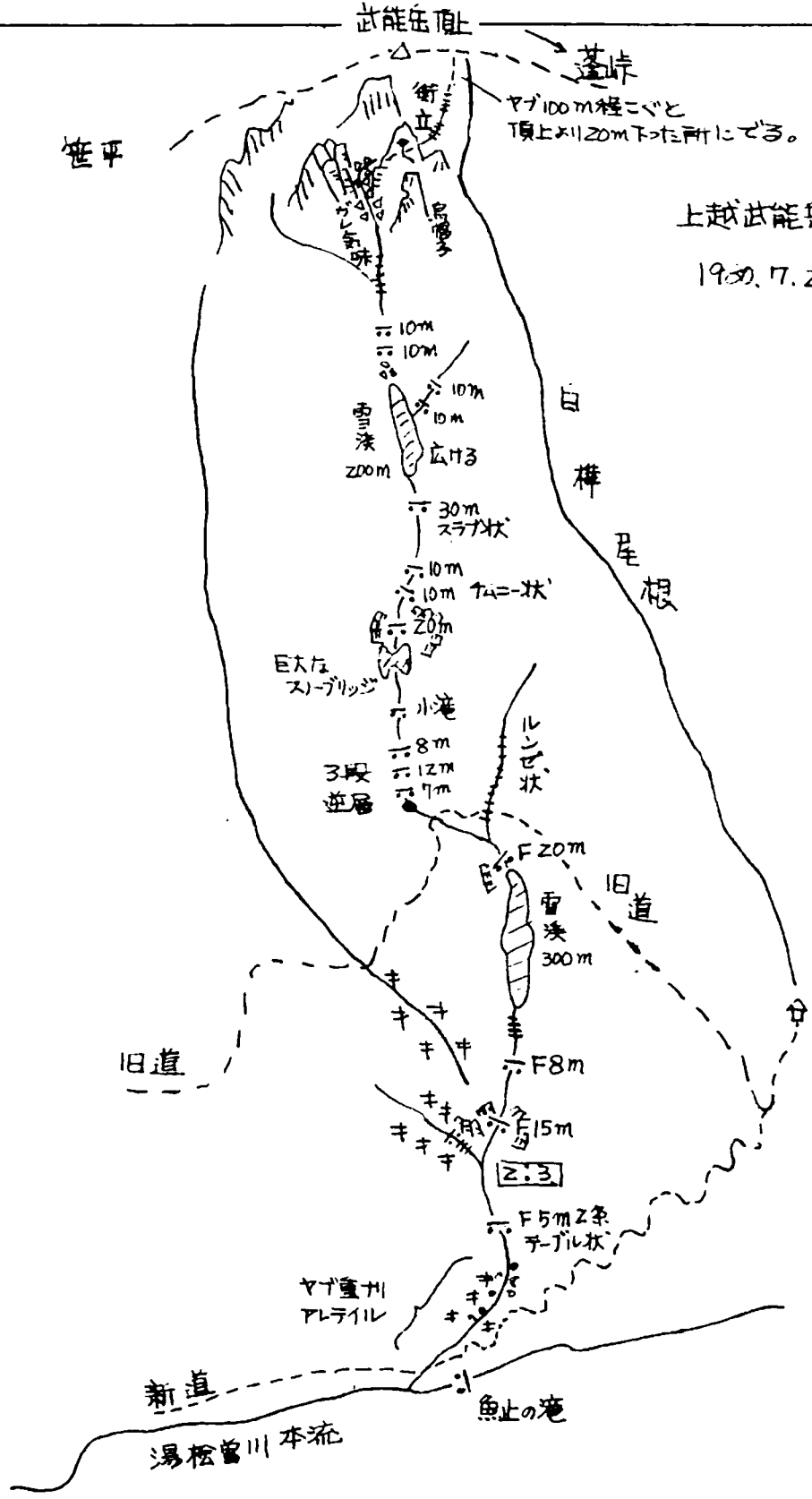
蓬峠

ヤブ100m程こごと
頂上より20m下付所に在る。

笹平

上越武能岳武能沢

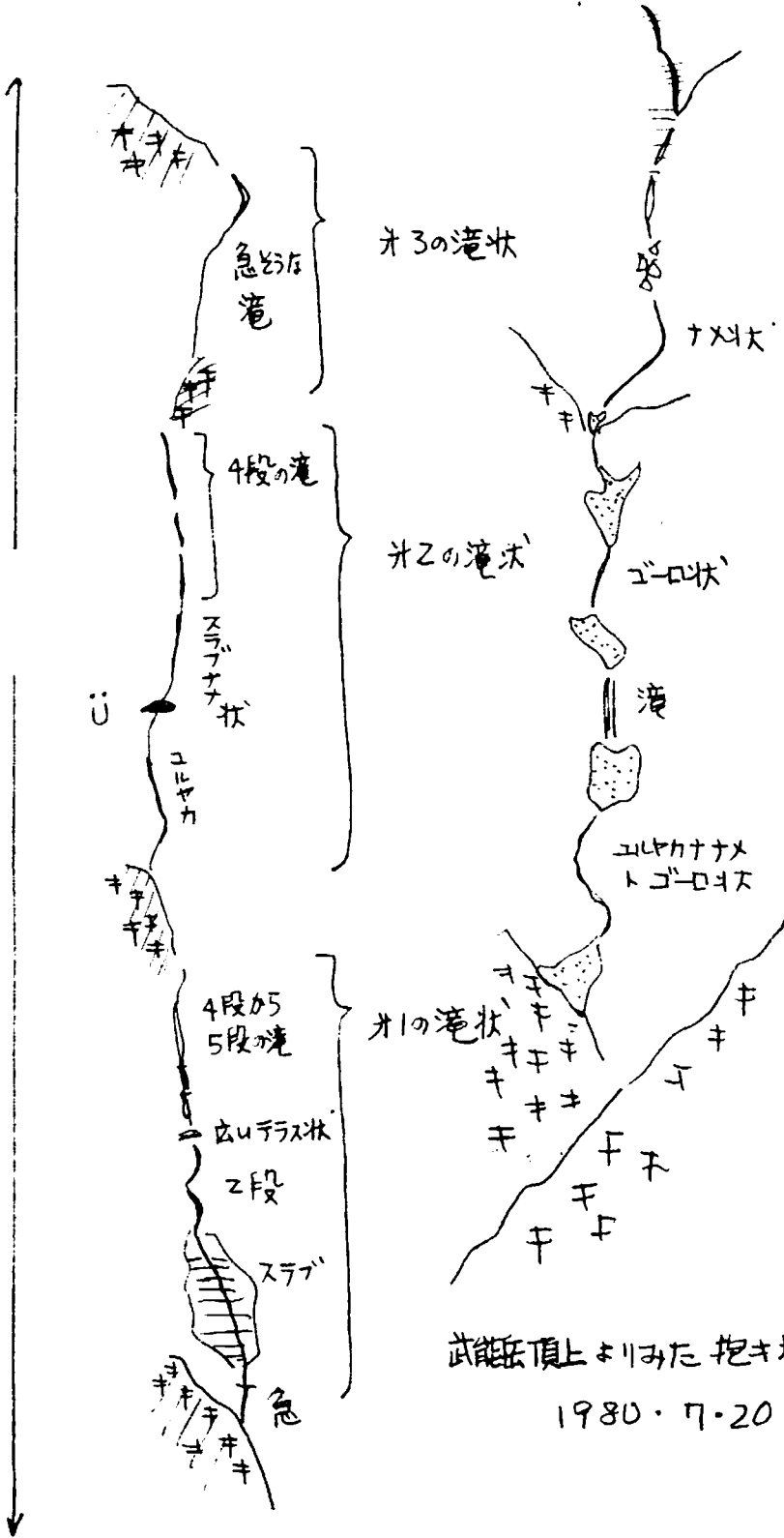
1950. 7. 20 森下(単独)



距離

高
距

400m



武能岳頂上よりみた抱キカエリ沢・大倉沢
1980・7・20

- ・7月29・30日(雨)
低気圧通過の影響で朝からどしゃ降り。
やむえず穴殿。久米30日下山
- ・7月31日(雨のち曇)
井汲・穴戸・宮崎・青藤下山, 藤岡河台
雲, 平方面への縦走のため残り。

合宿をふり返って、何よりも残念
だったことは、本来の目的である滝谷の
岩登りを一本も登れなかったことだ。
しかしあの時の天気ではやむをえなかつた。
(井)

雲, 平・高天原周辺
—— 係 藤岡毅 ——

- ・1980年8月1日～8月6日
- ・藤岡毅・河合秀樹

8月1日(晴) 双穴池(14:40)
北穂(6:55) - 檜倉(11:55) - ~~雲平~~
・久々の好天に恵まれ走る道に双穴池向
うが4日ぶりに歩いたため縦走あたり
からバテバテになる。

8月2日(曇-雨)
発(5:45) - 鷺羽岳(10:52) - 雲平(12:44)
・鷺羽池では、雷鳥・カモシカに出会い、カ
ナカいい所であった。

8月3日(曇-雨)
発(5:20) - 水晶池(7:12) - 高天原(7:45)
~ 竜晶池(9:17~10:08) - 雲平(12:37)
・高天原にアタックする。温泉につかり
竜晶池を散策する。ここで心身ともに洗濯。
竜晶池は素晴らしい所である。

8月4日(曇-雨)
発(11:03) - 祖父平(13:31)
・祖父沢を下降する。途中から雨となり
さんざんであった。

8月5日(曇-雨)
発(8:15) - 雲平登山道(10:20) - 双穴池(12:45)
・黒部源流をさか上る。途中より雨となり
びしょびしょになって双穴池にかけ下る。

8月6日(晴-曇)
発(6:22) - 鏡平(7:40~8:15) - 7サビ
平(9:35~10:10) - 新穂高(11:00)

—— 鳥甲山・白石山(釜川~中津川) ——
—— 係 森下道夫 ——

- ・1980年8月5日～8月10日
- ・森下道夫・青谷知己・宇佐美雅己
中野敏彦。

雨のどしゃ降り夜中。着合で、あれこれ先々
の事を考えていると、想像の環が広がり
とどまる所を知らず。ふくらみにふくら
んだ計画は、鳥甲山北面釜川下流
(興味深さ) - エビリュウ沢 - 白岩東壁
~ 大岩山西壁 ~ 魚野川源流 ~ 野反湖
となったが、色々な制約、小さな岩泳と
なて散ってしまった。しかし忘れぬ山
杯となった。

○釜川エビリュウ沢溯行(M.A.U)

8月5日(晴のち雨)
五宝木橋(9:00) - エビロのゴジュ
(11:10) - 勘五郎大滝上(15:00) - ビバク
(16:45)。

飯山線森宮原、列車を降りると今を
さかりにジージーと鳴る虫聲の音がいかにも
も真夏を感じさせてくれた。駅前で
タクシーを拾い、五宝木へ向う。途中、鳥
甲牧場は何とも素晴らしい所だった。
ここから見ると、鳥甲山は航空母艦の
ような山体を壁々と横にのぼし、頂
上付近は小さな船橋のように、ちよこ
頭をもたげている。樹木は何となくひ
ねていて、うねりを感じさせる力強い樹
相だ。五宝木橋より溯行を始めるが、

ありふれた溪相であり観音沢をわけ、小石をハネこんだような泥岩の岩盤が所々あり、ハク岳の赤岩沢を思った。小ゴルジュを越え、堰堤があったのには、泥を食った。エヒロのゴルジュは、首まごつかる所があったが、両岸泥岩に囲まれた釜とナメと河原が雑居しているような所で、気持ちよくツボツボいける。途中一瞬の事であるが、野ネズミが急流に流れ、もがきながら深い釜に落ちこんでゆくのを見て世の中、自分の知らない色々な事があっているんだなあ、妙な事に感心した。遠く勘五郎滝が見えだし、釣糸を垂れて来る仲間をさまに急ぐ、勘五郎滝を登ろうと、かなりの物量をかつぎあげてきたのだ。西側から圧迫された沢の奥に入ると、5m程の釜を四方からぐるりととり囲んだ伽藍の中に居る事になる。何とも異様な所で、左手は真黒な垂壁であり、右手は幾分傾斜の緩い凹状の土壁である。正面は、これといった凹凸のない土管の表面のような所を、高みからしがきが落ちくる。左手クランクを数m登るが、簡単に素直に諦めた。青谷は右手凹状をダブルアックスとハンをびしびしうめこんで登ろうと、乗り気であったが、自分にはそのセンスがわからなかった。少々もとど、草付を何ともイヤな思いをしながら登る。オゼの沢へ降りると真より雨となり、8m程の滝をこつ越えた左岸窪地でビバークとした。

8月6日(雨のち晴)

発(7:50)~ヒロゼのスラブ(8:30~10:00)
~稜線(12:30)~鳥甲山頂上(12:45)
~BC(18:50)

左岸白ガレを見て、沢が急に右に曲がると、伽然滝場が連続してきた。途中でつめて

しようがなく、釜の中に飛びこんだり、すべり落ちたりして、伽然痴態をさらけだしてきた。このあたりより、沢を構成する岩の要素がかわってきて、スベスベした白っぽい、しかしな岩にたつてきた。そして、待望のヒロゼのスラブにいた。このスラブは、上段、下段にあかれ、その中間点には傾斜もきつ、一見滝の落口のように見える。100m程とまいてまたが、優に200mはあるだろう。2Pアングライにして登った。本当の落口は、左の円形らしいナメ床を横からすべり込んで、右に向きをかえスラブへ落ちこんでいくようになっていて、ここをすべりゆく水も、おぼけが目を、まっとハチクリしてあわてているにちがなうだろう。ここからは棕色のきれいな岩盤が、二股となる。本流は右手で、凸凹状にかたまり、急にコケムシた岩床になった。たつたい奥秩父を思わせる滝を登っていく。水ダンドンとかれたし、時々見え隠れしていた頂上してヤブゴギが始まった。指の太さぐらゐある曲竹の頑強な反挽力の中をくぐり抜ける。1時間稜線に出た。沢の終りにはいっも道でた。そこにはいっもやすらぎがあった。道の情、道々のなつかしさがあつた。そこから頂上まで10分であつた。

上ズネの降り口がどうしても見つからず、11時ヤブゴギに下山がはじまった。赤岩沢におやすく、ただなう上ズネを水平にヤブゴギパスしたりして薄暗くなりだした頃、白沢降りる。幻想的に一面もやのたちこめている白沢のスノーブリッジをくぐり抜けて1-ス地へ急いだ。

○白岩東壁 ZLンゼ(森下、青谷)

8月7日(晴)

発(7:00)~取付8:00~奥の二股13:40~白岩16

宇佐美は休み、ZLンゼは白岩の頂上め、ZLンゼであり、標高差600m、東壁のルート